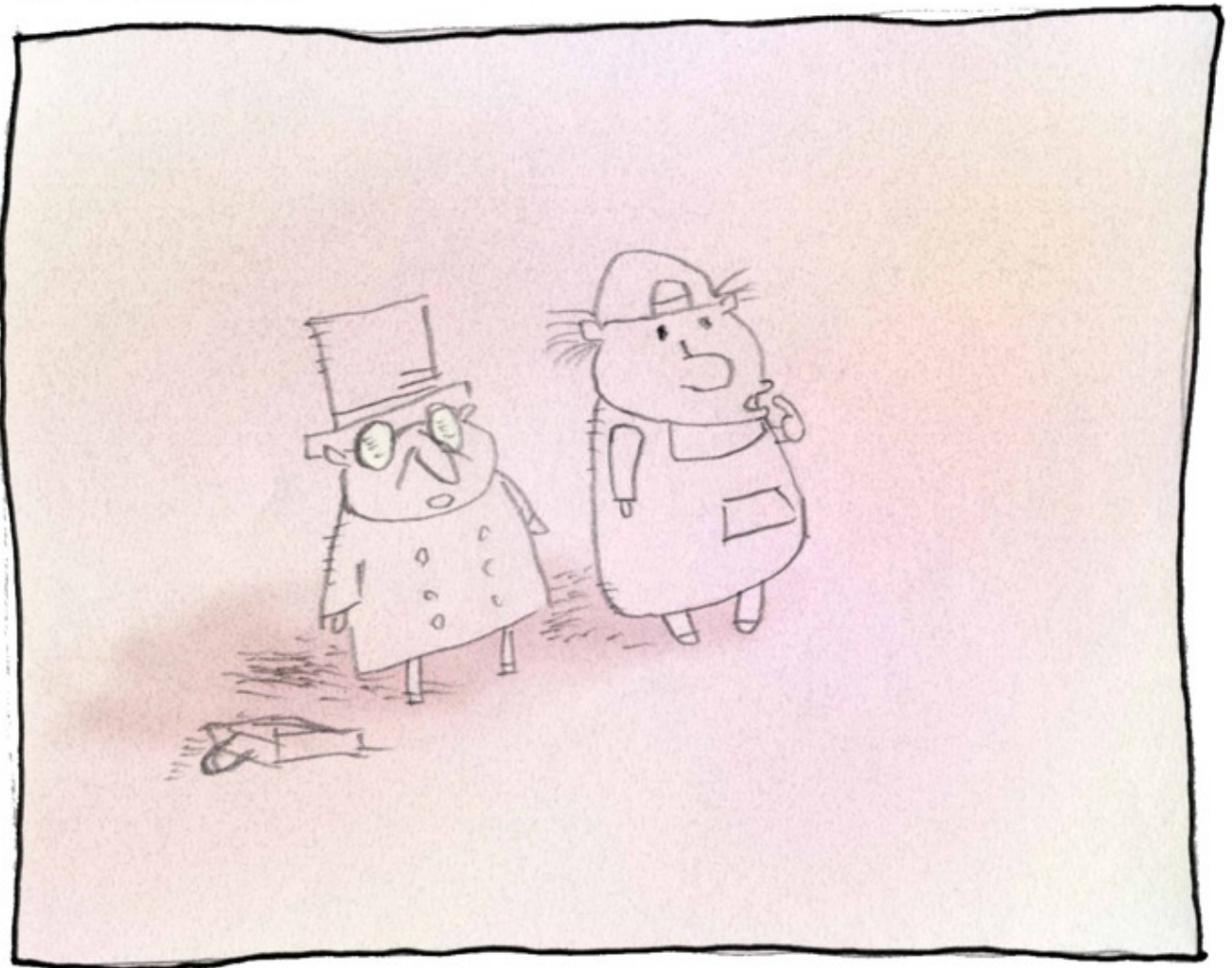
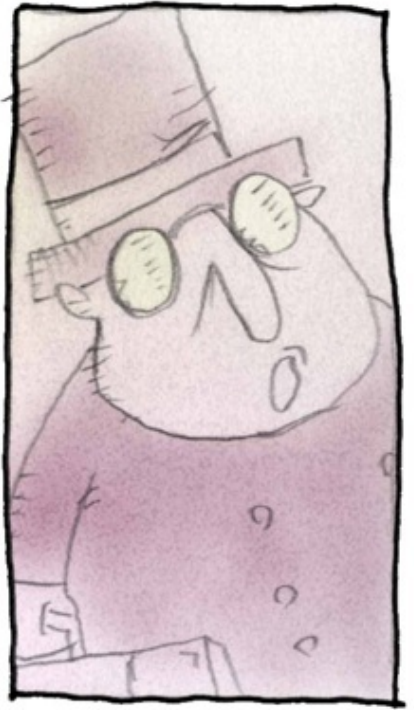


GLIB THROAT

BY
NIJEMAS

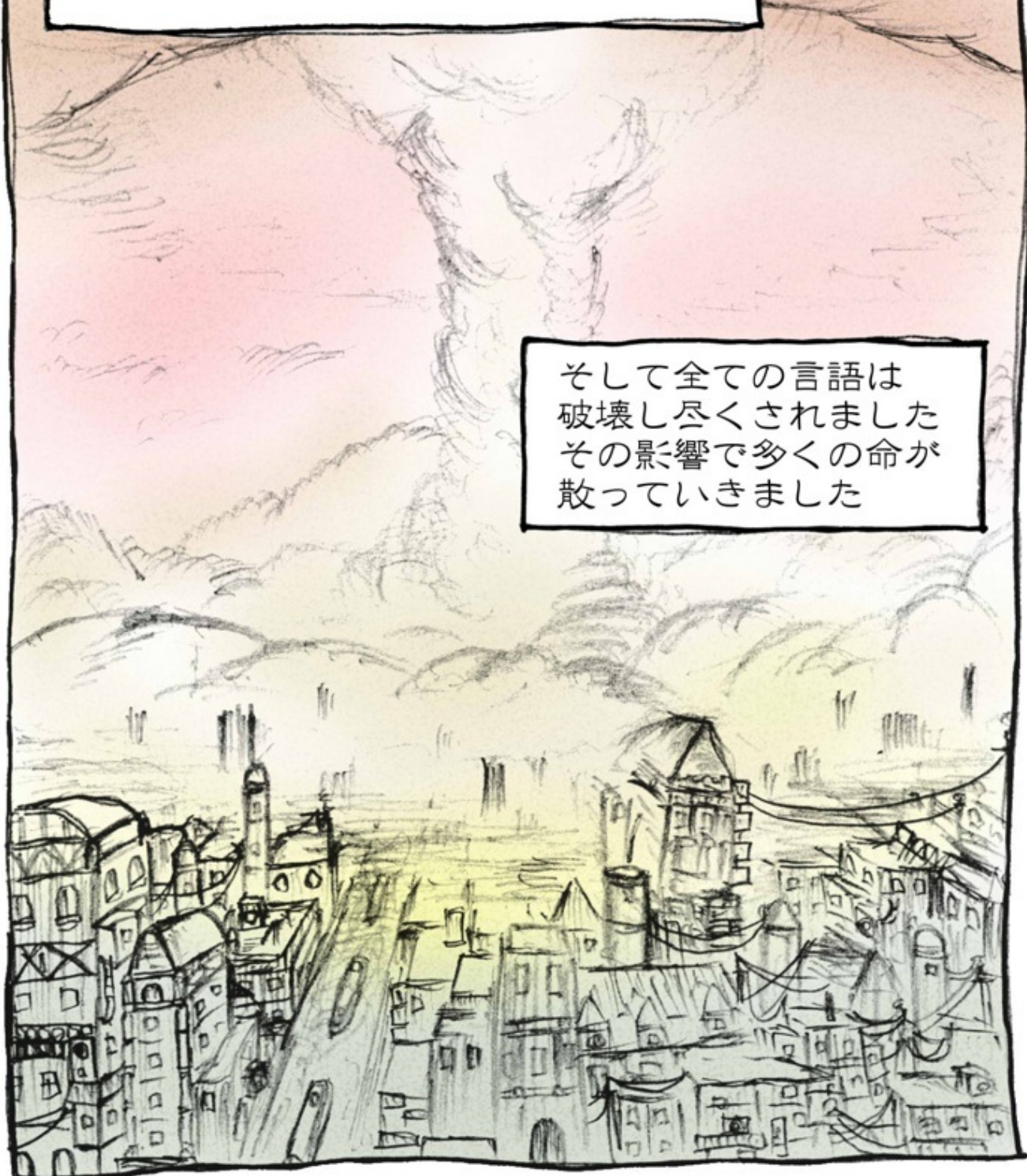
咽喉頭異常 ニジェマス





ロックとポップの核爆発によって
世界は再び死にました

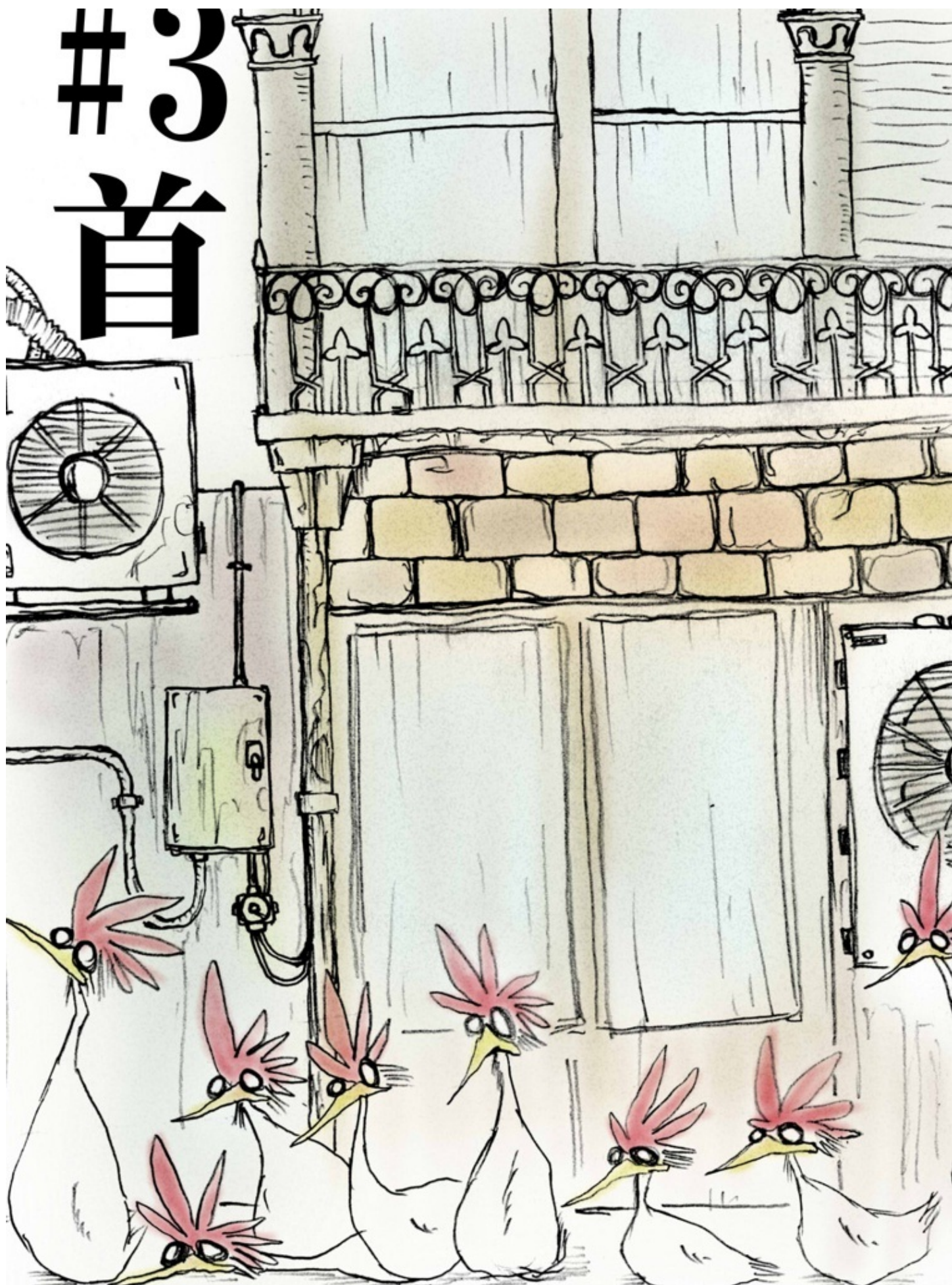
そして全ての言語は
破壊し尽くされました
その影響で多くの命が
散っていきました

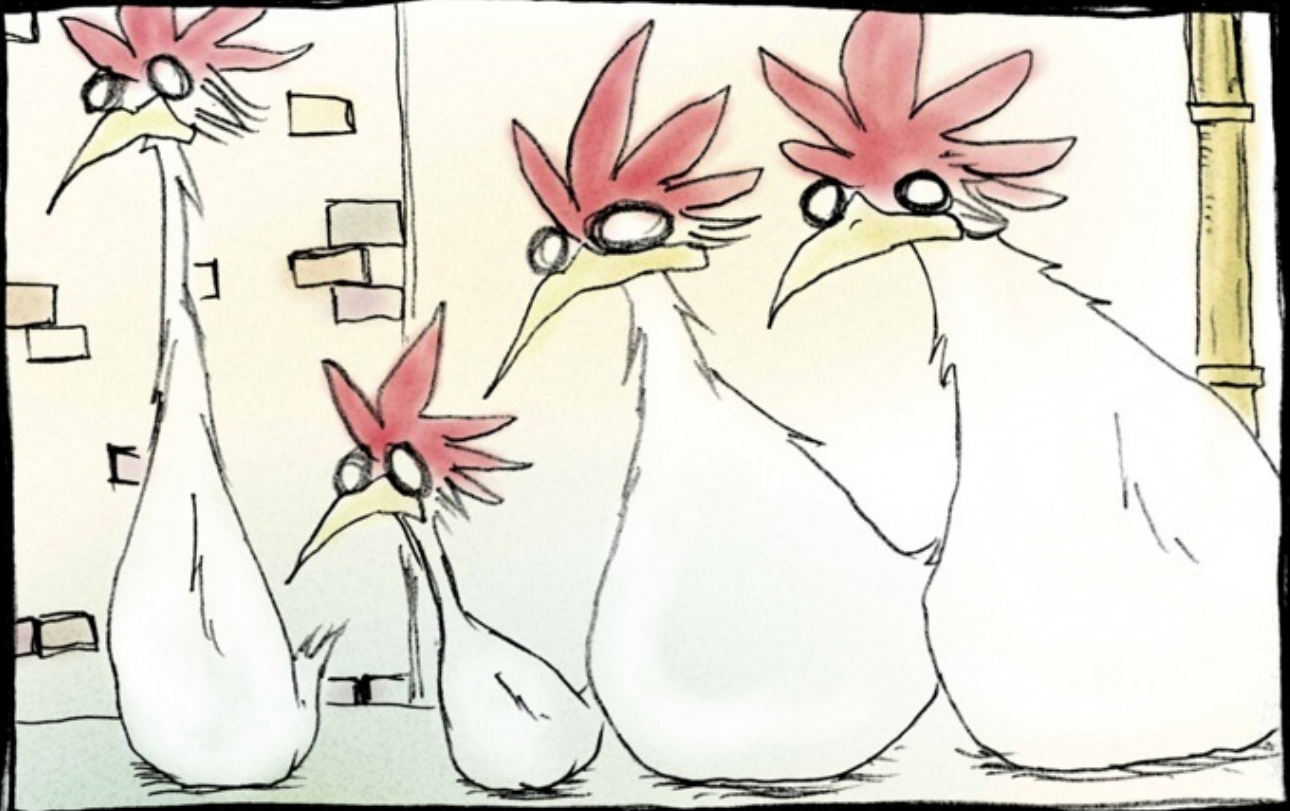


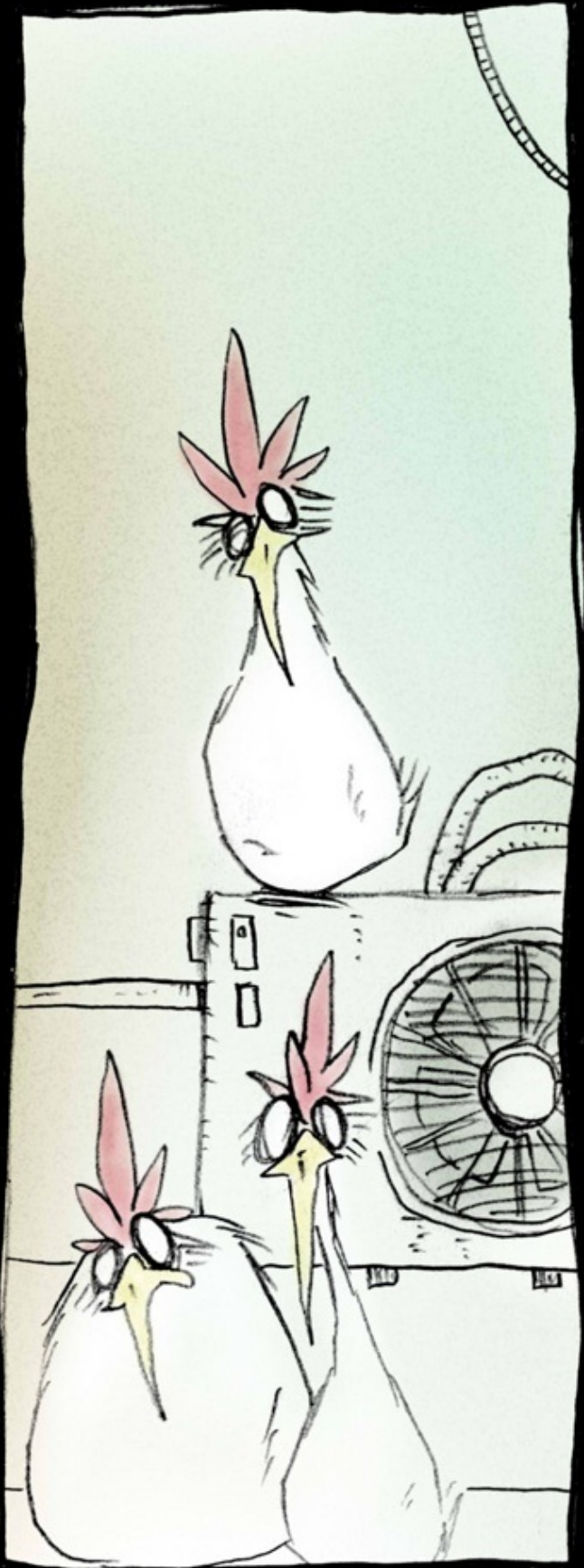
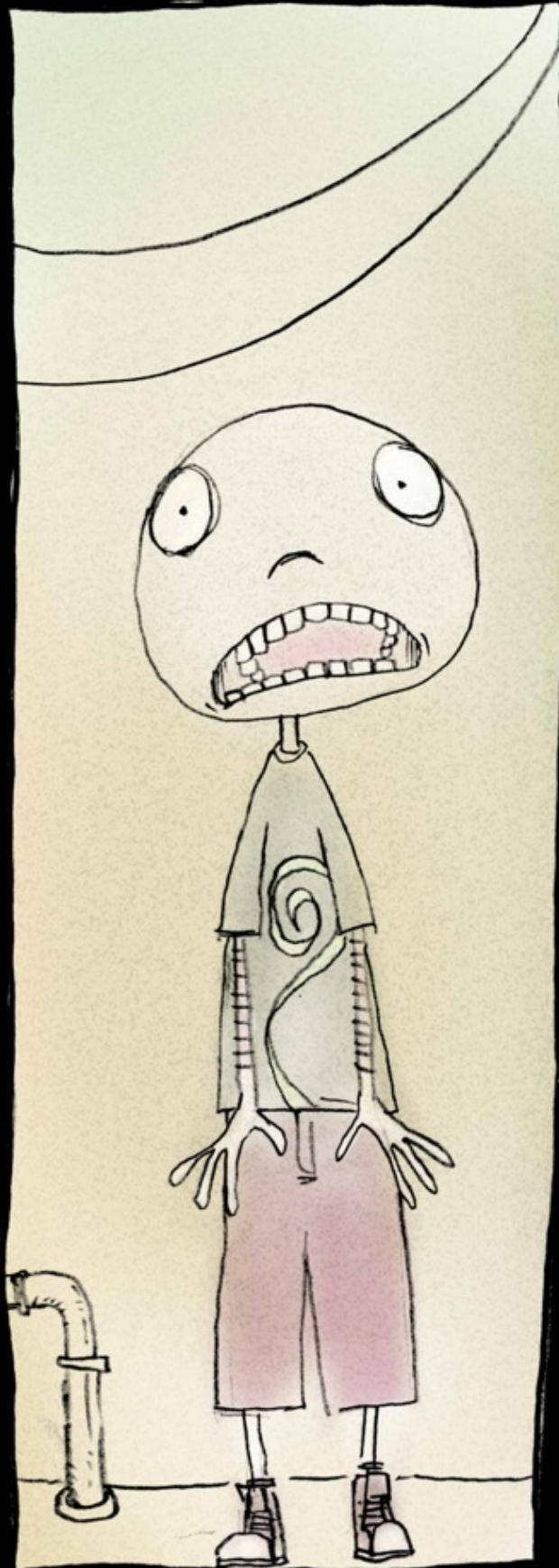


それでも僅かな生命と
過去の文明は
生き延びました

#3 首









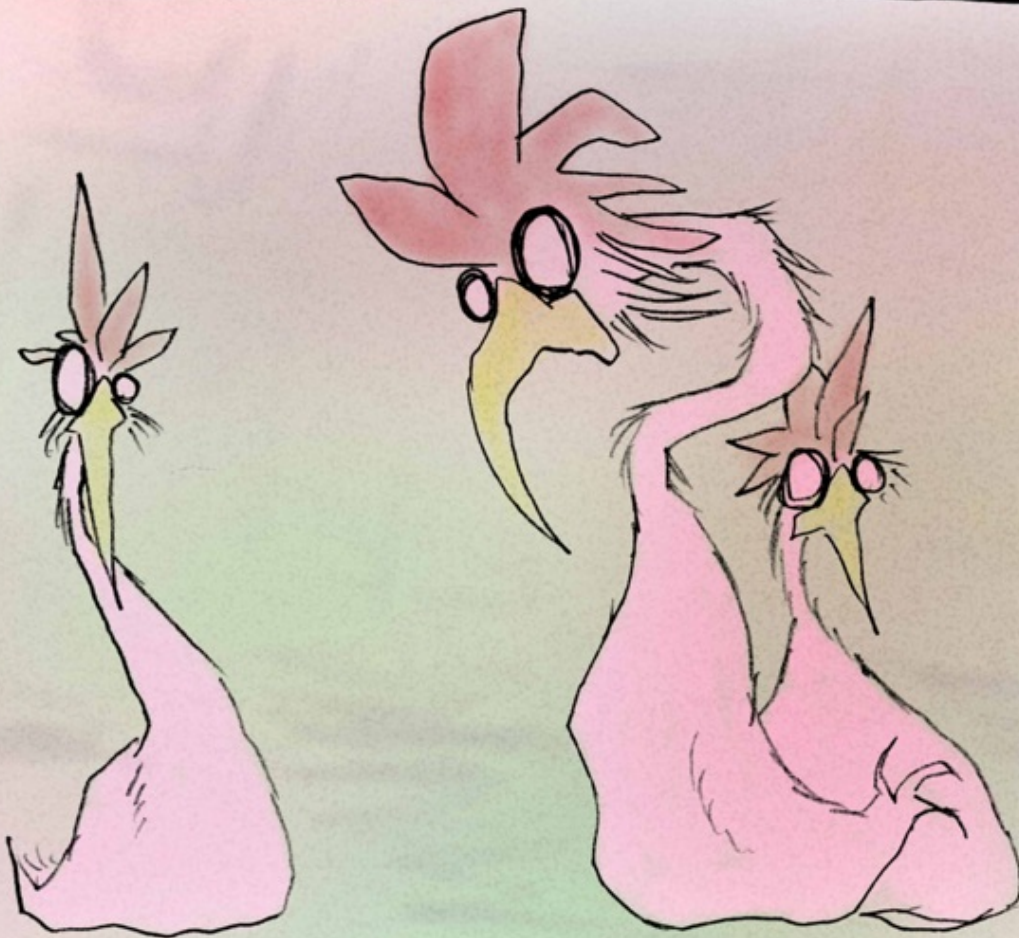
少年は喋っていません。

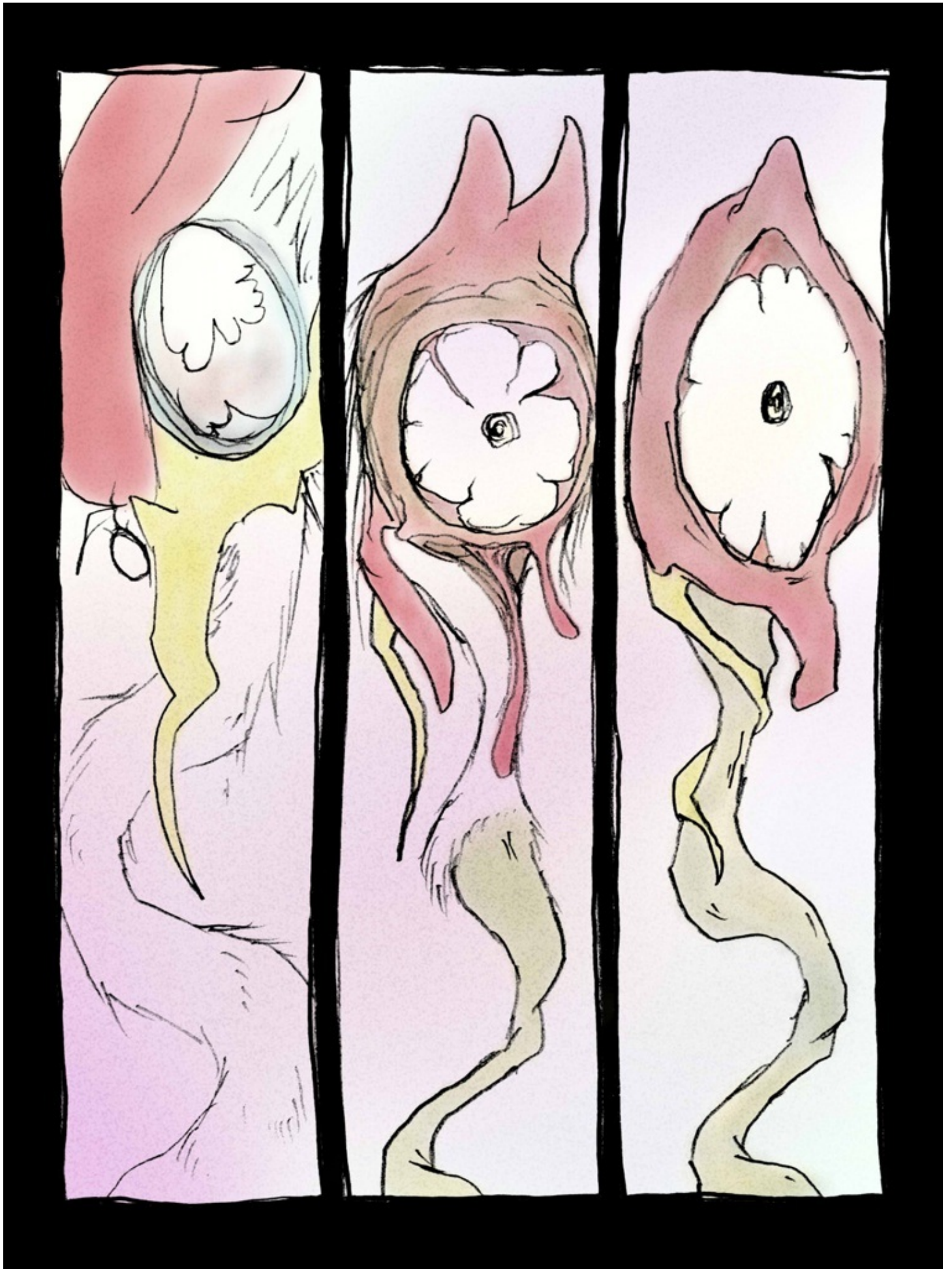
全ての言語は破壊されたはずです。



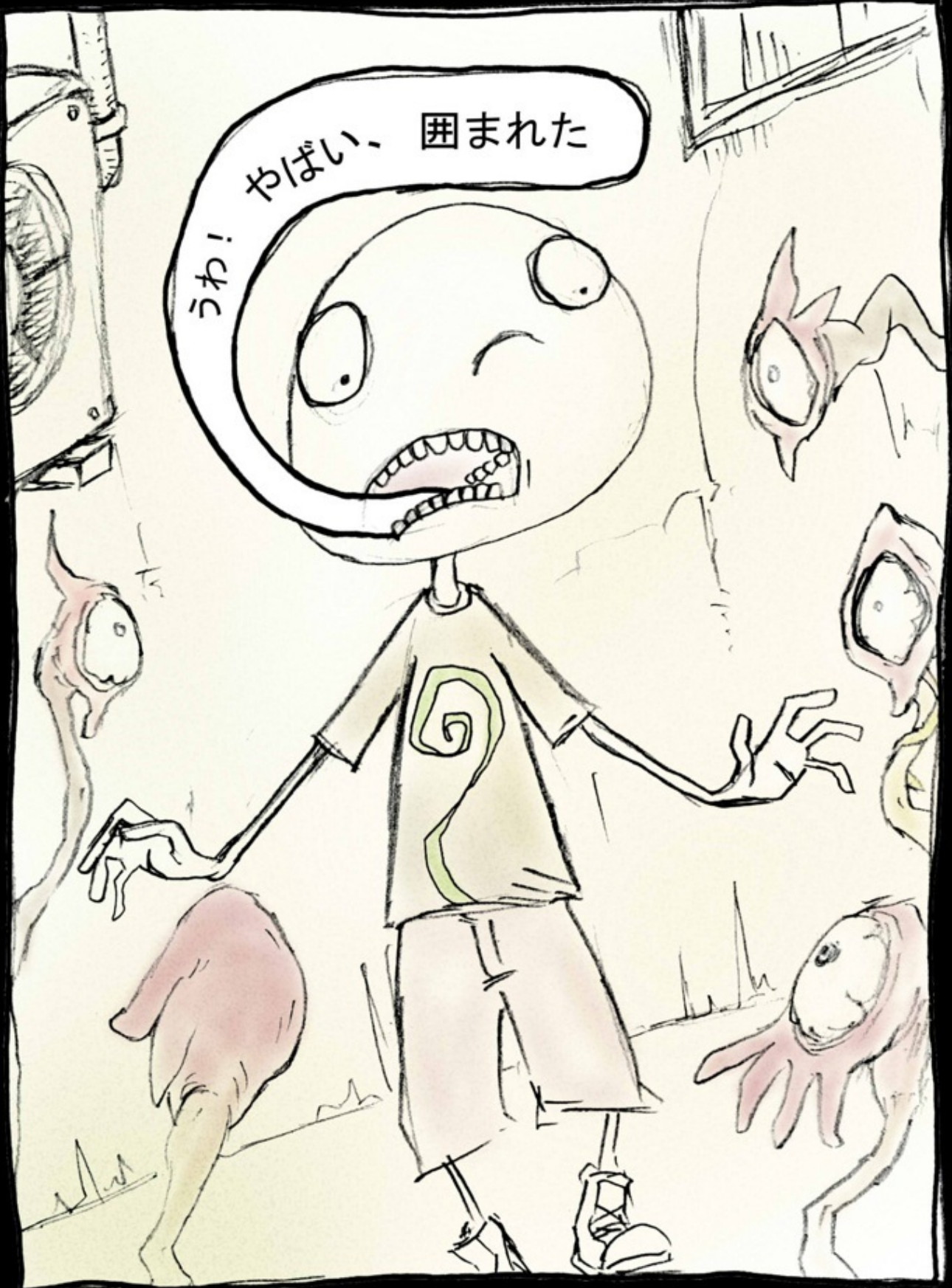
なにこれ？
ニワトリ多すぎ

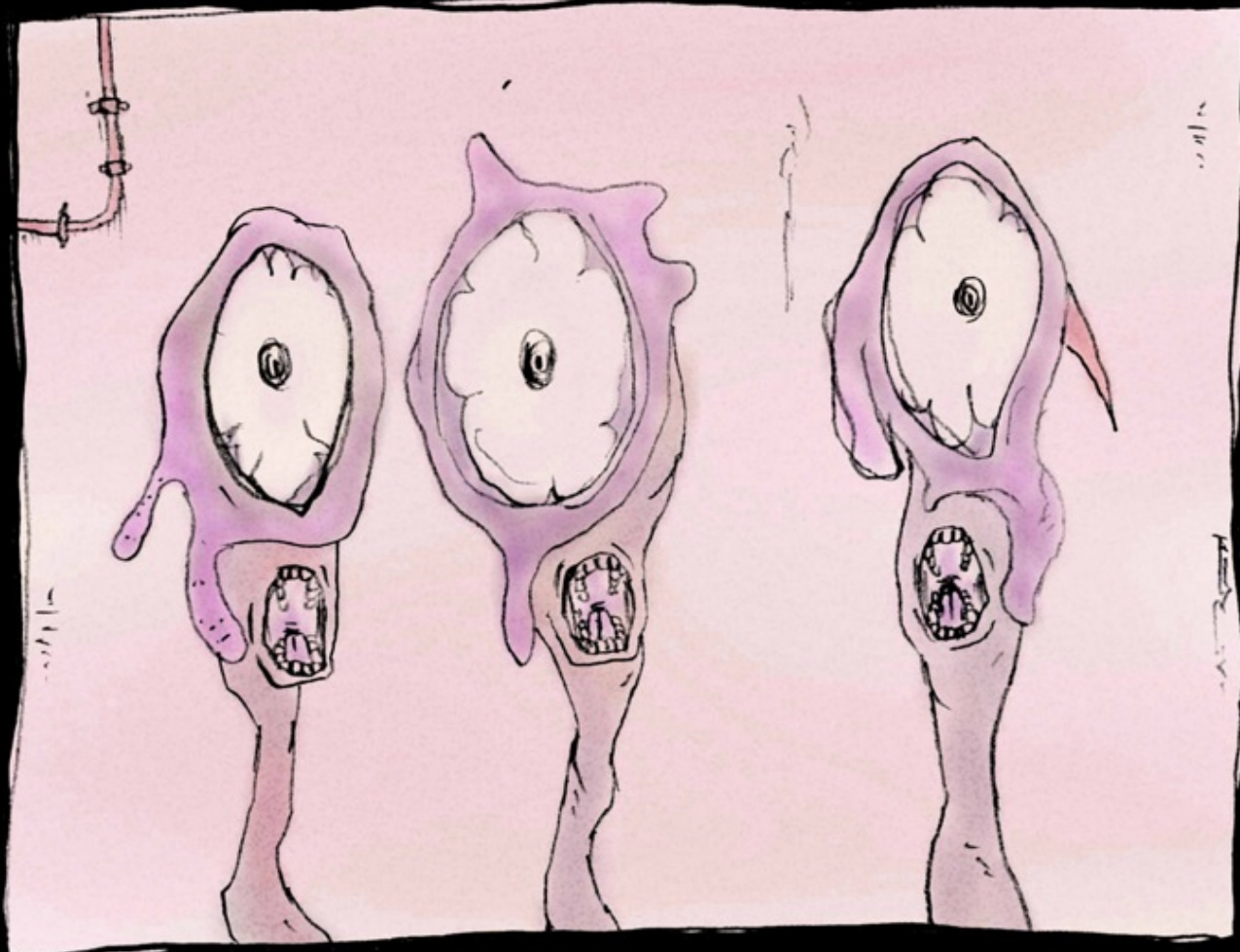
少年の喉の奥から
変な“音”が聞こえます。





うわ! やばい、 囲まれた





「なぜ言葉を話せる」

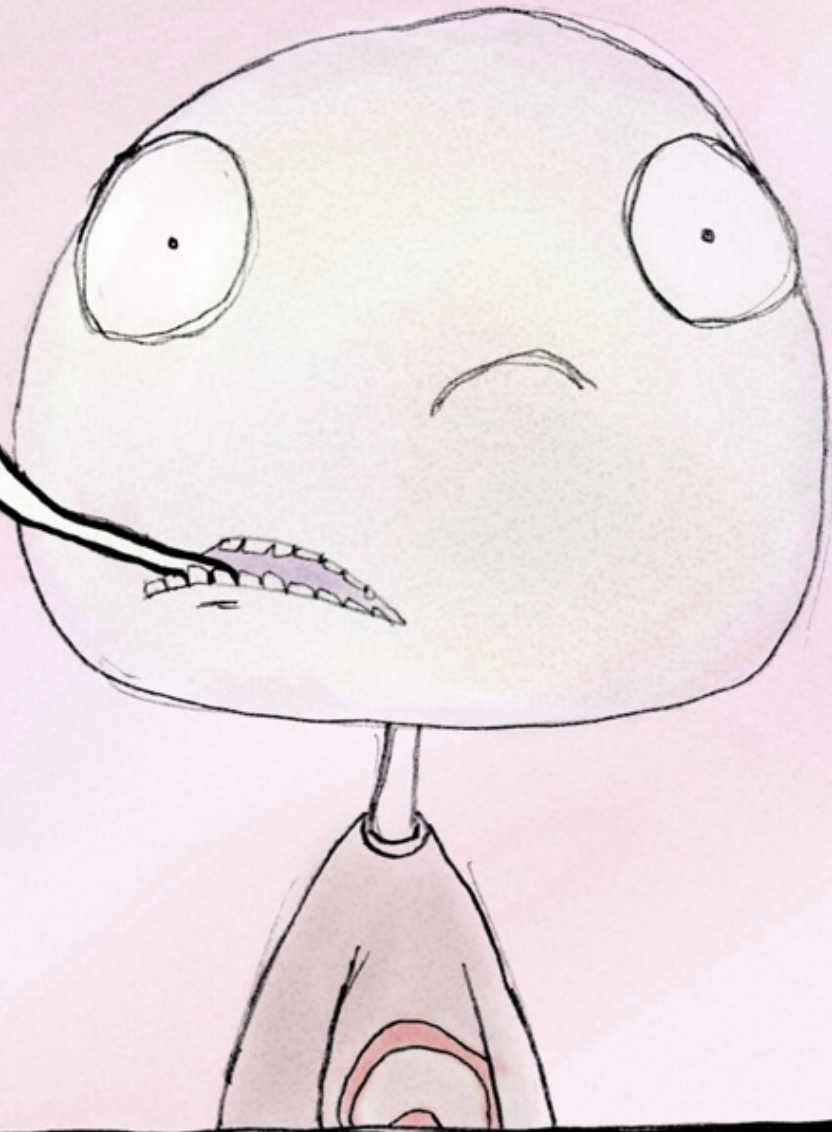
ニワトリから変身したヘンなモノは少年を問い詰めました。

「どこで言葉を覚えた？」

一切の乱れなく言葉を発します。

「答えろ」

は？



少年は、自分の喉の奥と

周りを取り囲む変なモノたちが

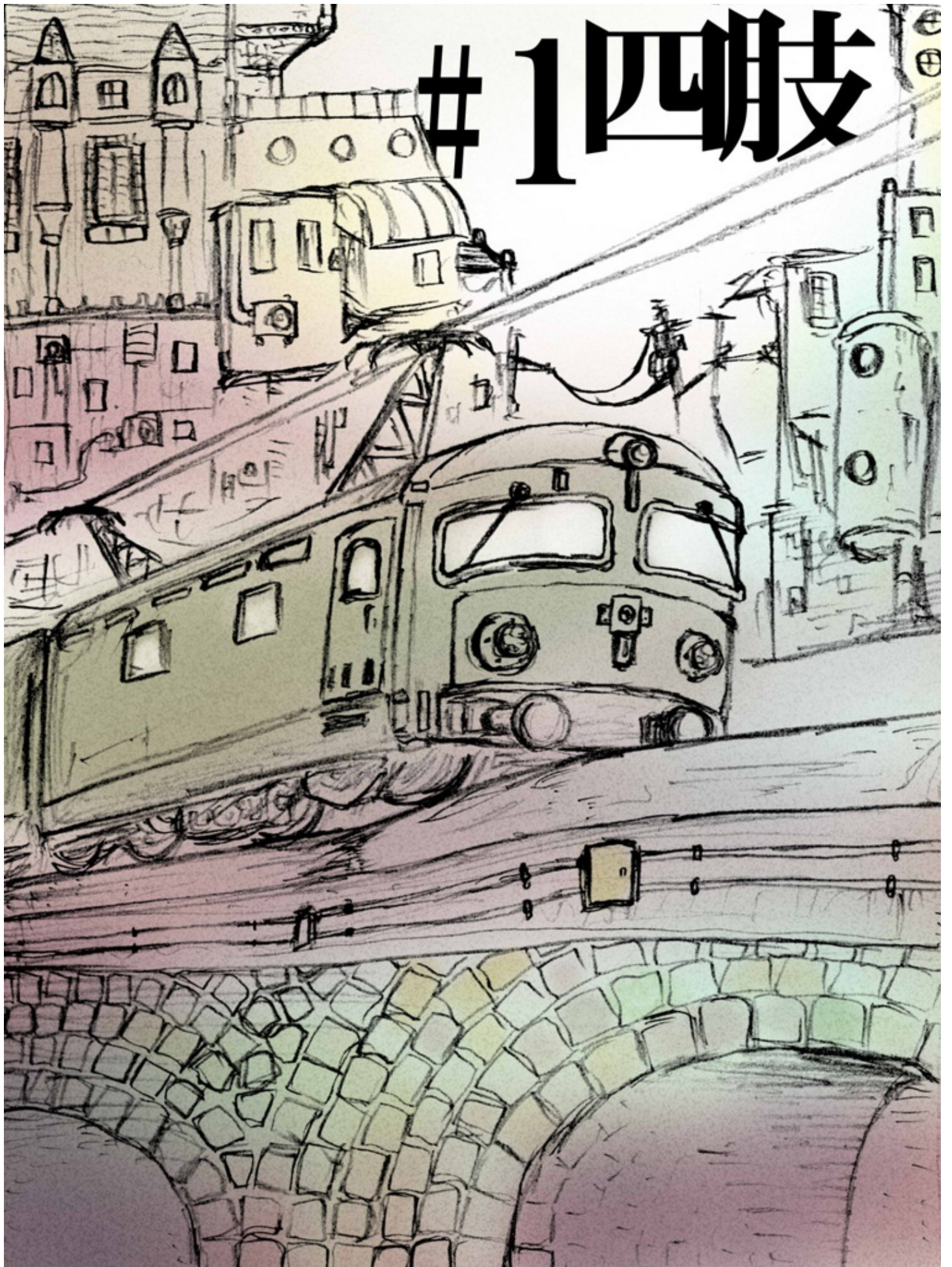
おかしな“音”を鳴らしている状況に

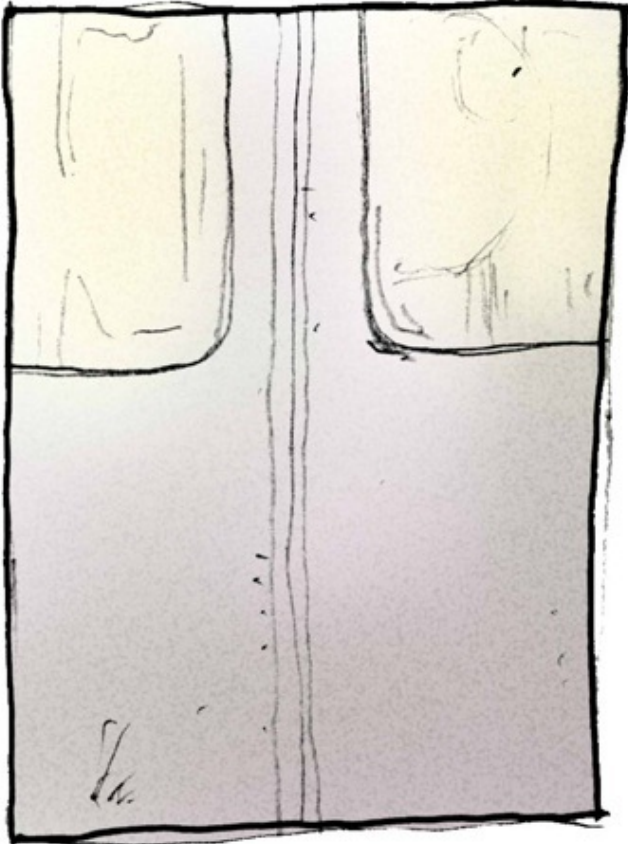
頭がおかしくなりそうでした。

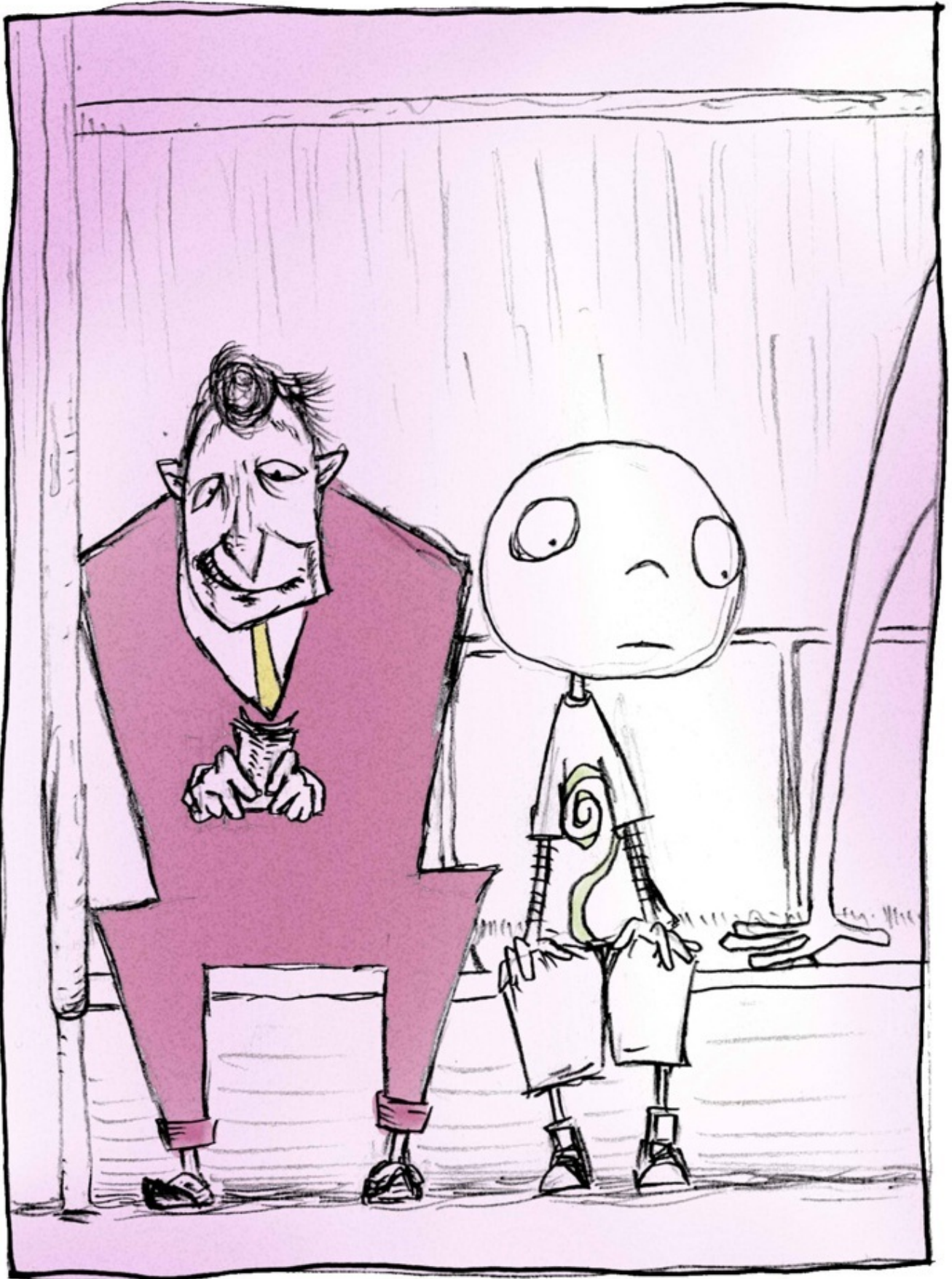
もしかしたら、おかしいのかも知れません。

頭がおかしいのか、世界がおかしいのか。

#1 四肢











少年は男が持っているものが気になりました。
指さして目線を送ると男は答えました。

「これか？これは新聞だ。細長く切って、
折り畳んで、で、読んでんだ。すごいだろ」



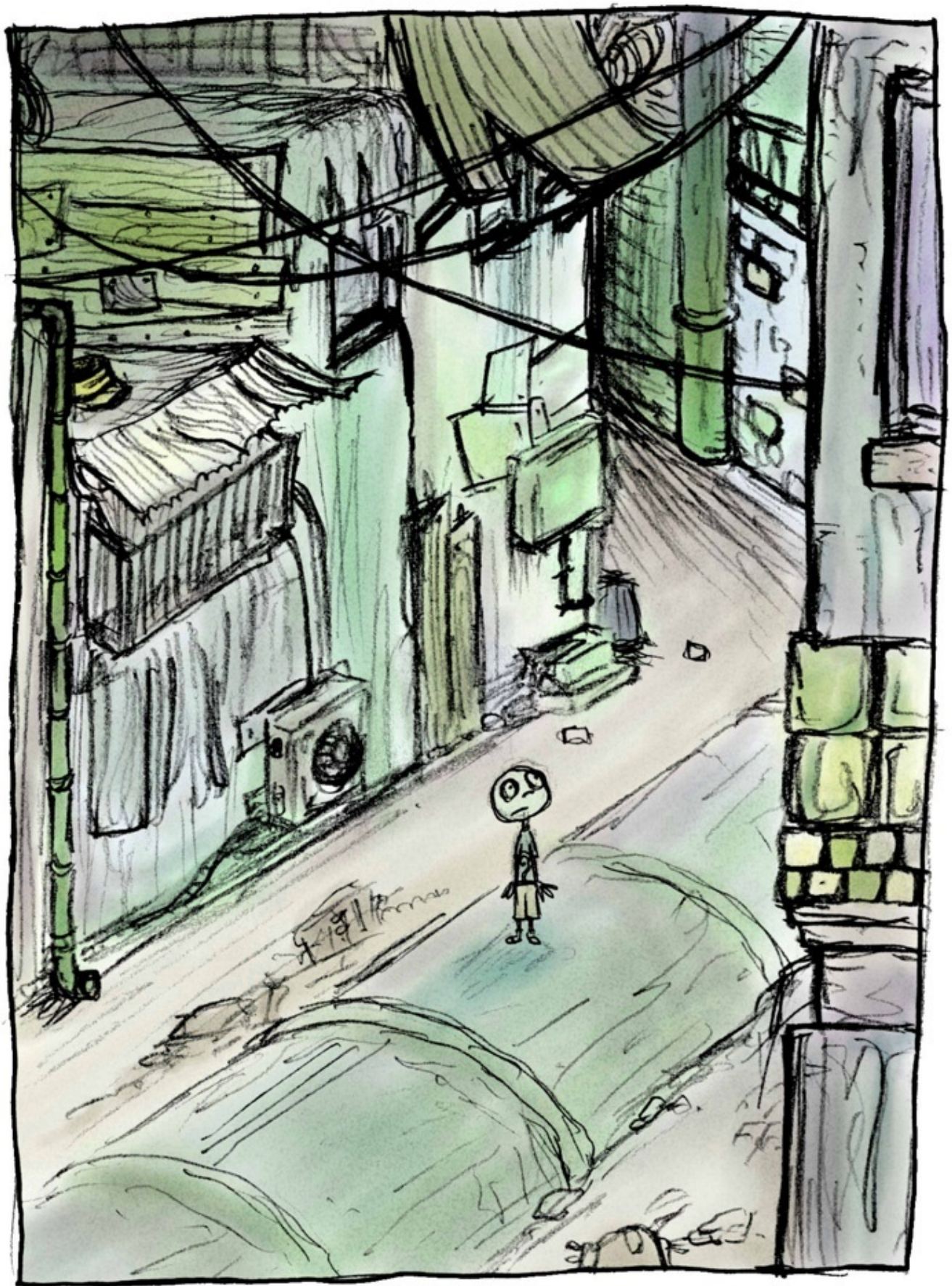
「わかんないよな」
男は何故か言葉を知っています。
「最近はこのあたりも出るんだったか」
男は呟きますが、少年には変な音を
鳴らしているようにしか聞こえません。

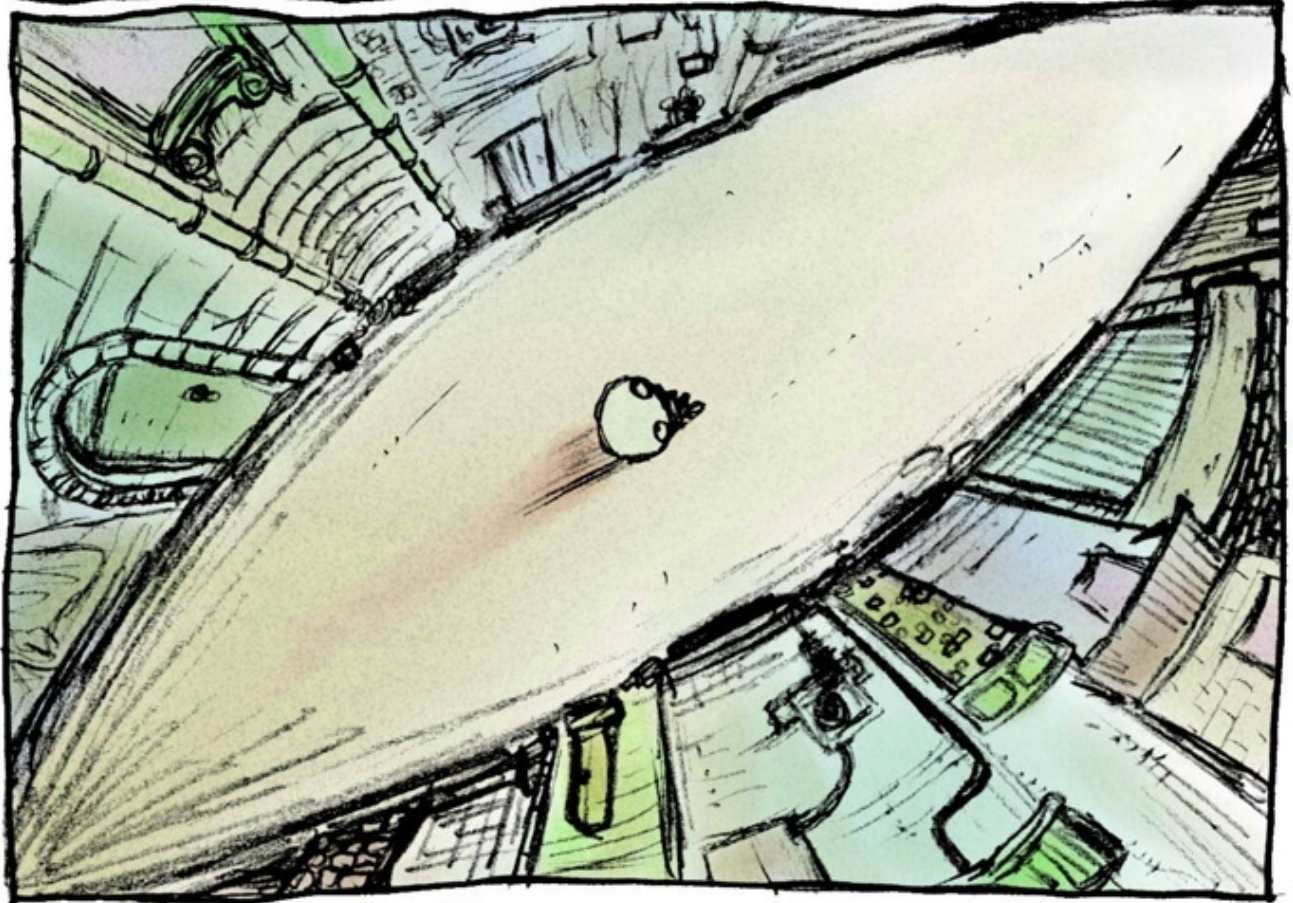
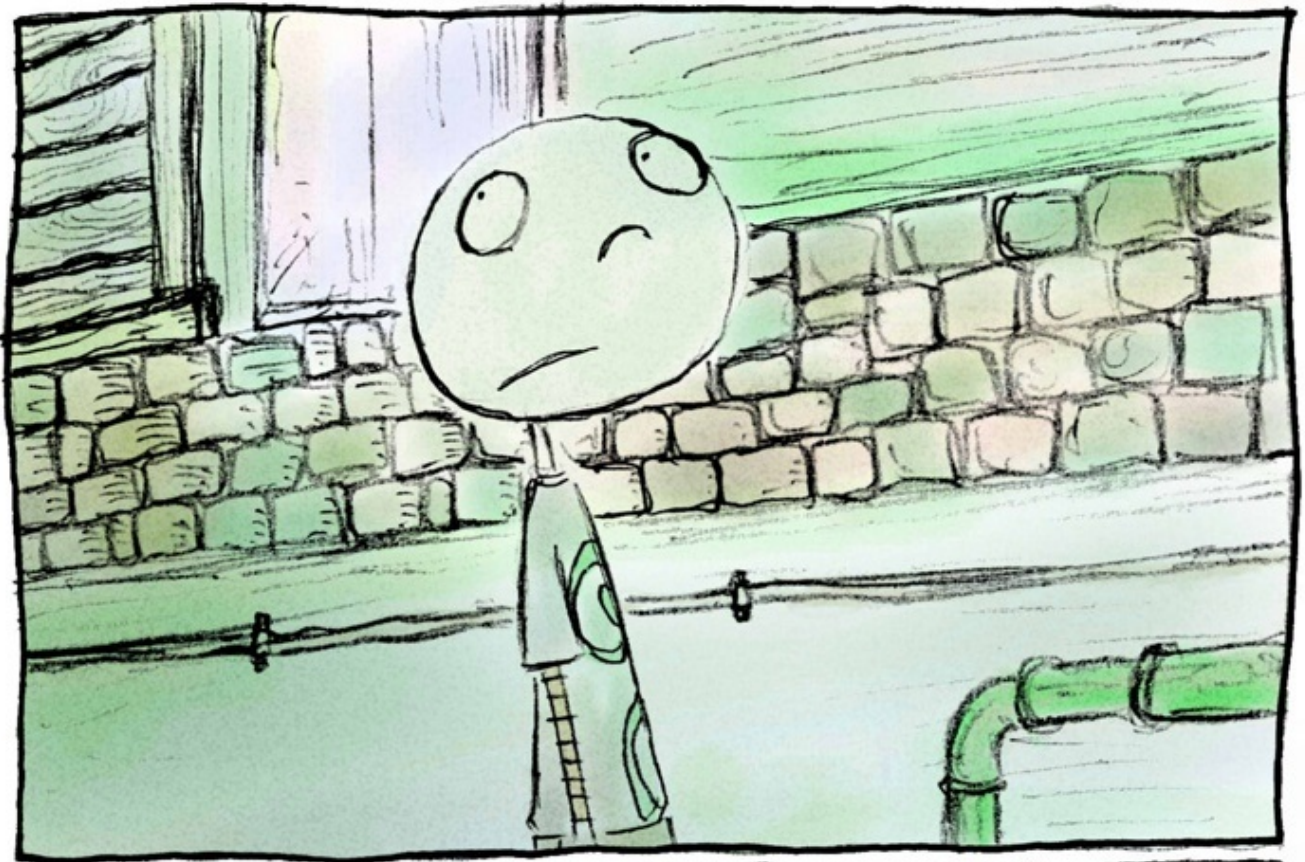


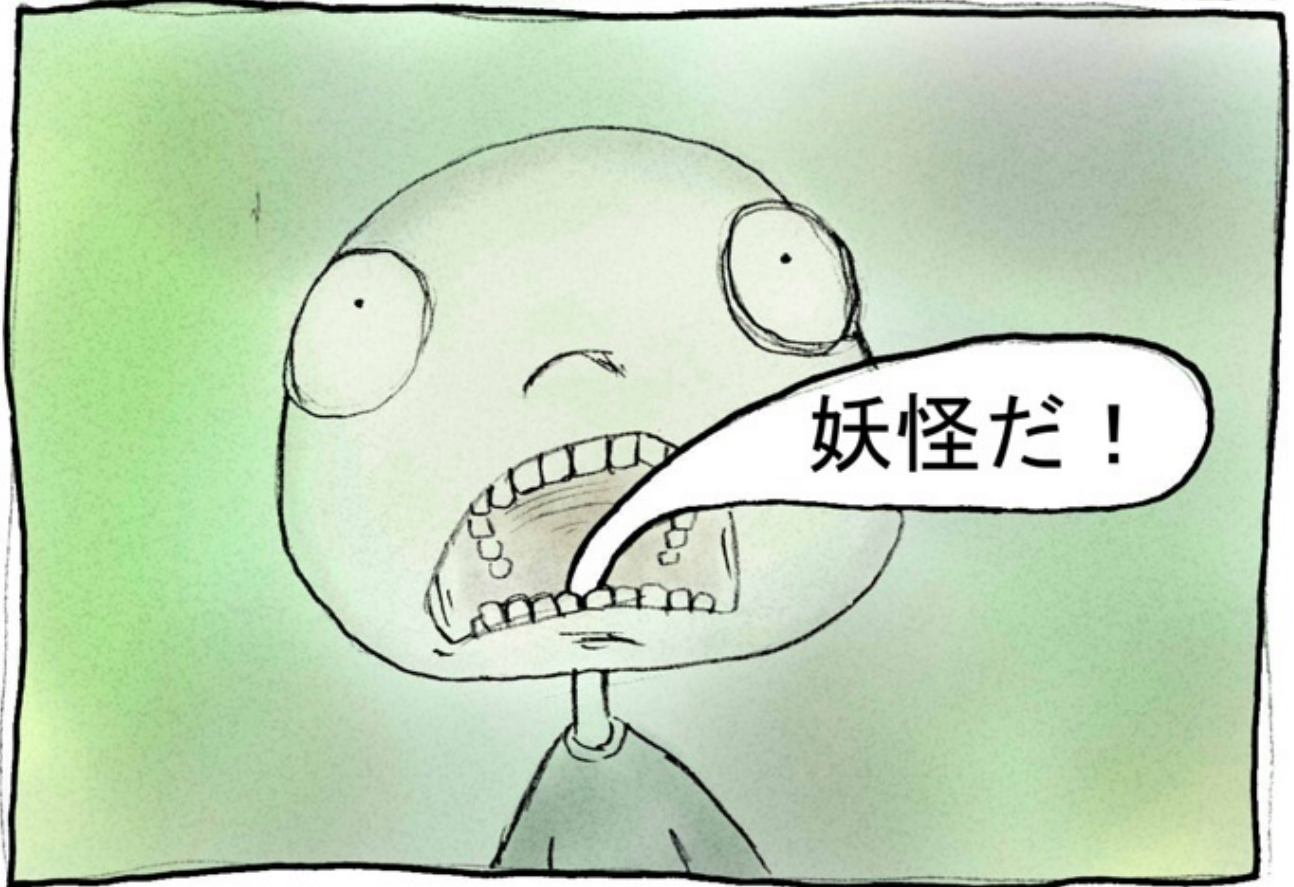
どういうこと？

喉の音が、男の音に反応している
ように思いました。
駅に着くと終始意味不明な音を
鳴らした男は降りていきました。

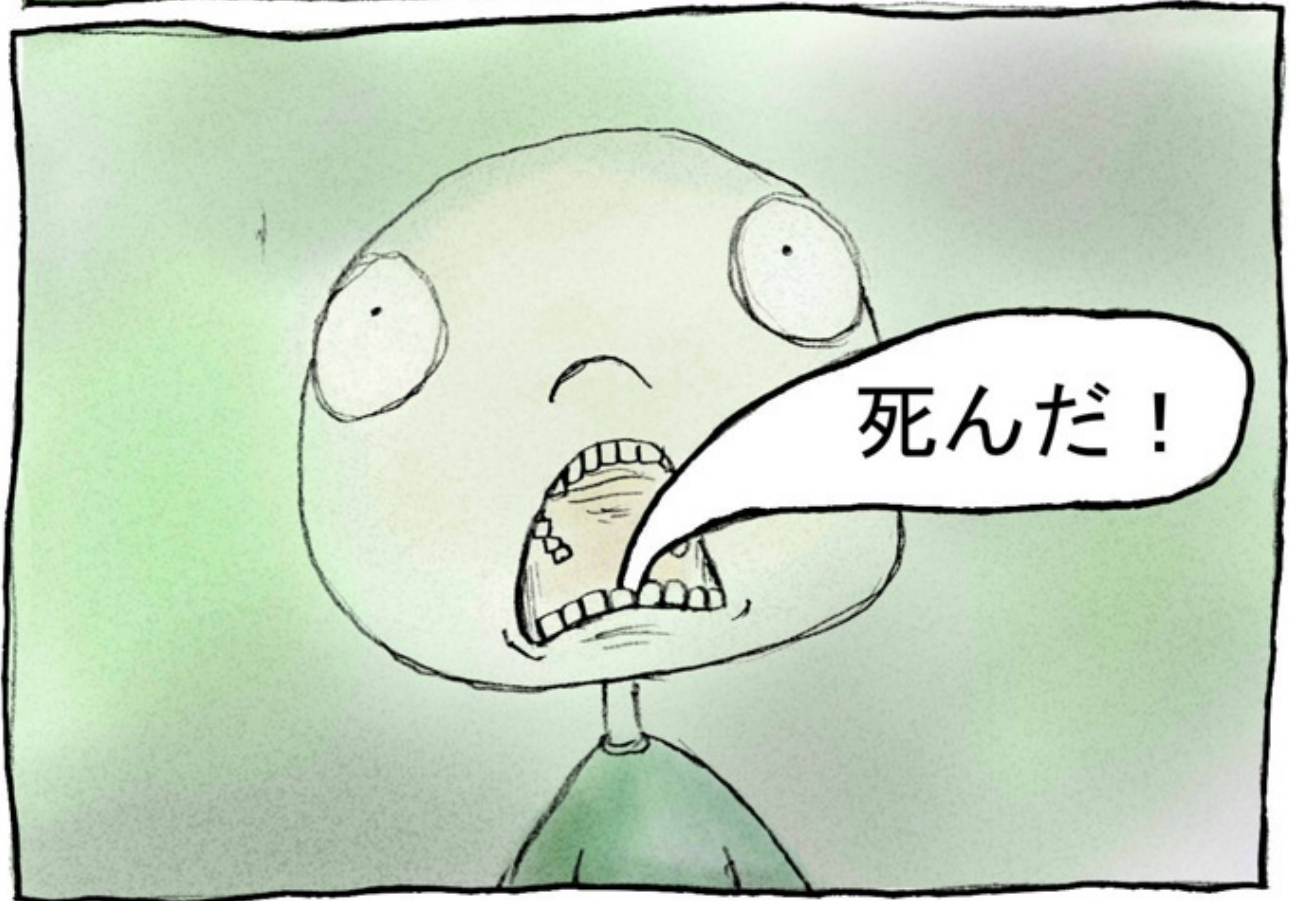
少年もすこし間をあけて
降りました。
駅のホームにはすでに男の姿は
ありませんでした。







妖怪だ!





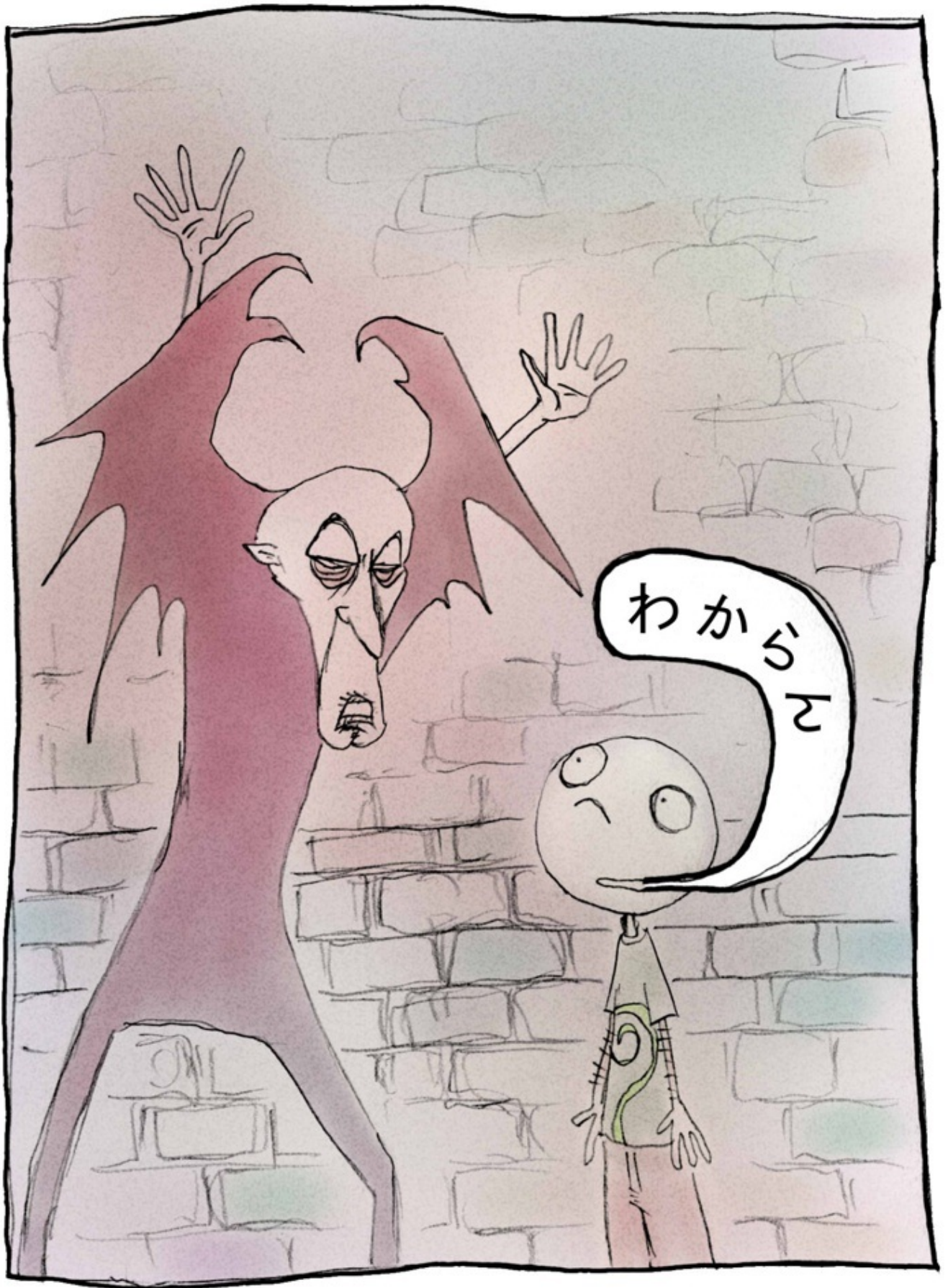


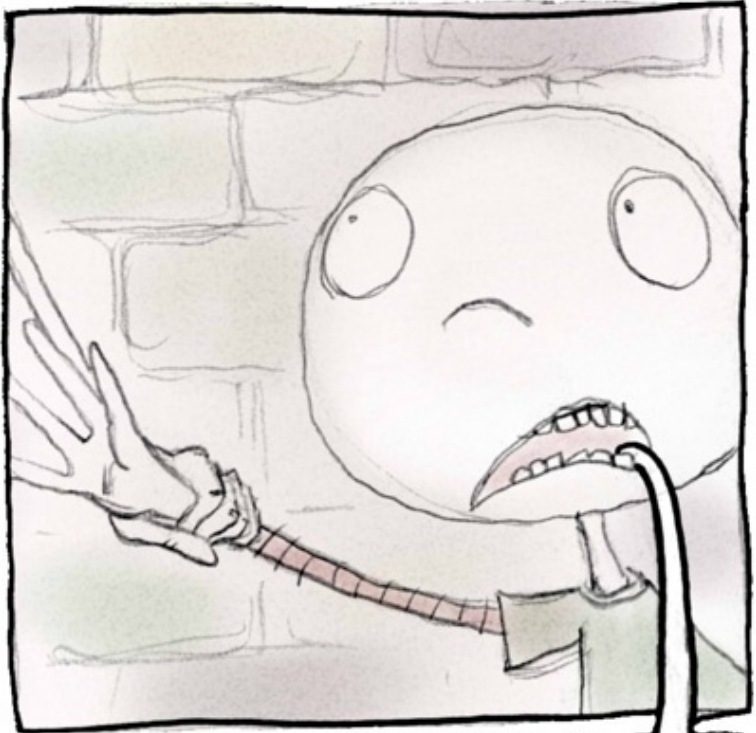
“喉の奥の音”が妖怪と呼んだヘンなモノを
皆殺しにした老人は、
こちらを振り向くと近づいてきました。











「キナサイ」

なんだよ

老人は言いました。
そして少年を連れて行きました。





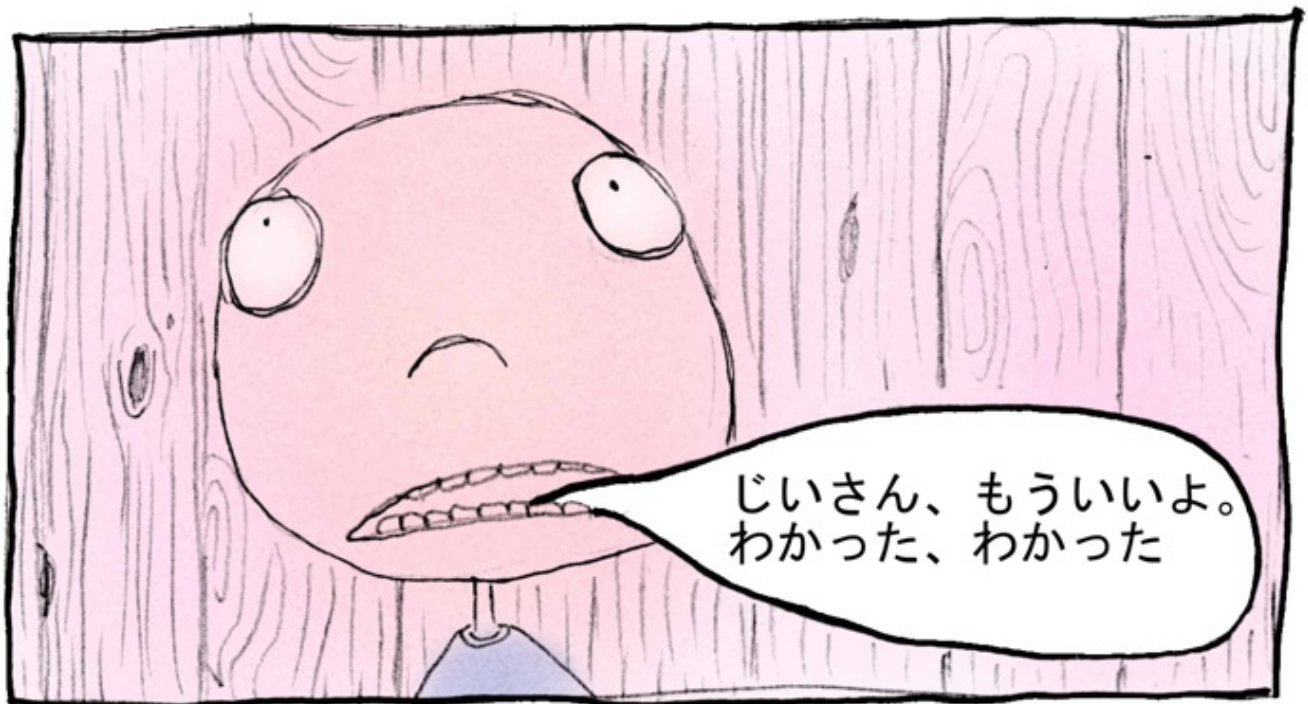


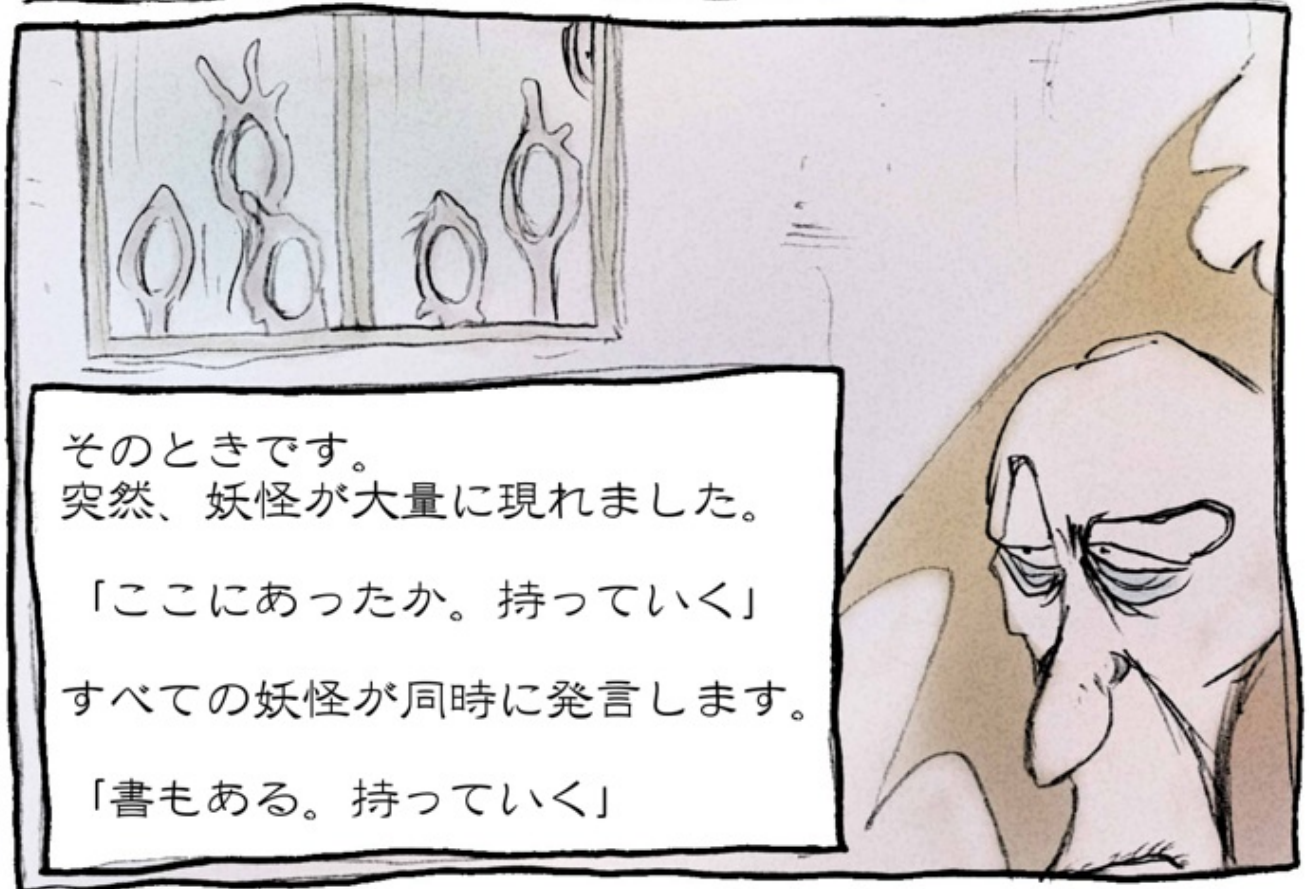
老人は本を持ってきて少年に見せました。

「コレハ、モジ」

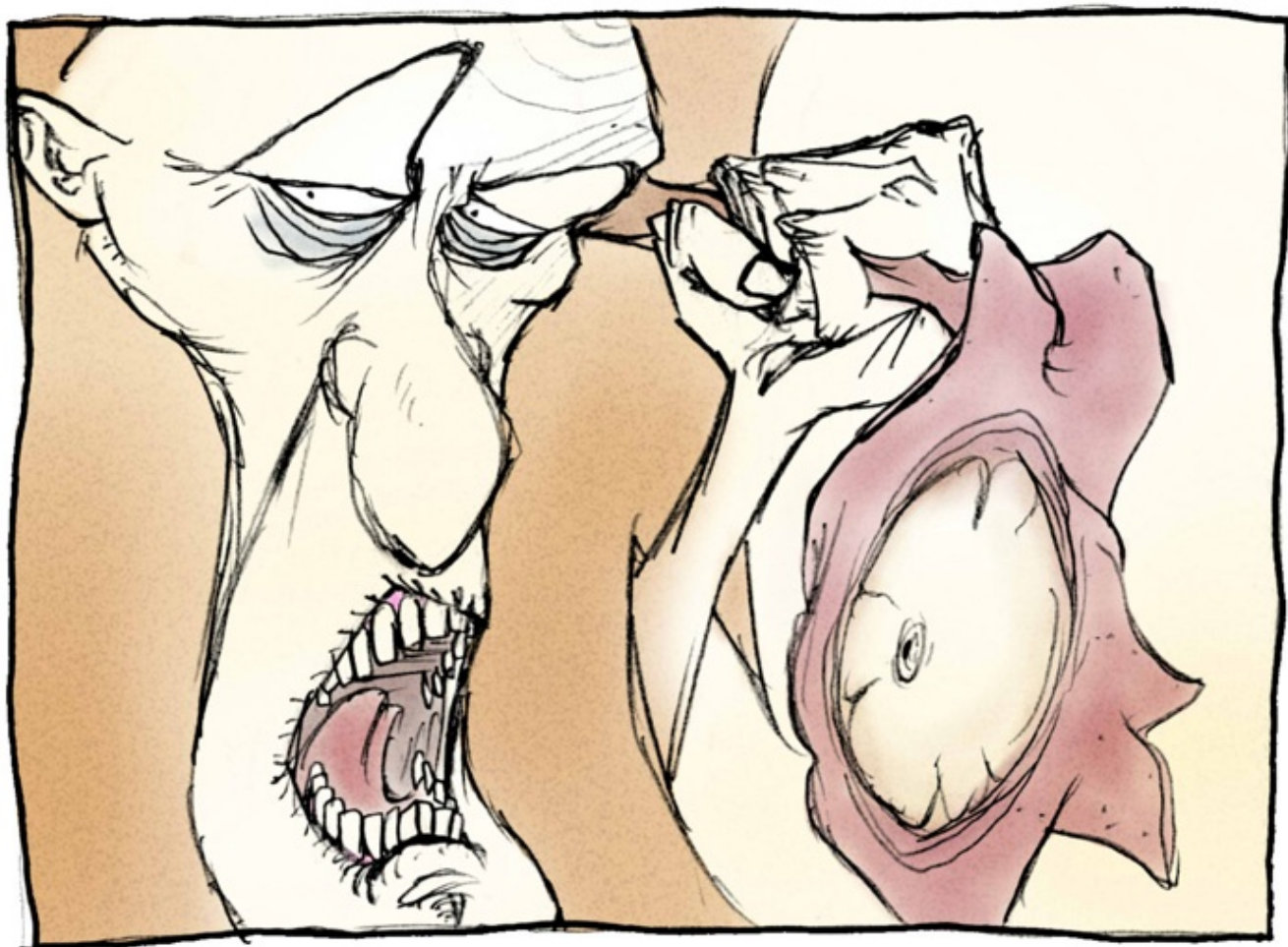
老人は少年にカタコトの言葉と身振り手振りで何かを訴えかけているようでしたが、少年にはさっぱり意味が分かりませんでした。

この変な老人からさっさと離れたいと思いました。





そのときです。
突然、妖怪が大量に現れました。
「ここにあったか。持っていく」
すべての妖怪が同時に発言します。
「書もある。持っていく」



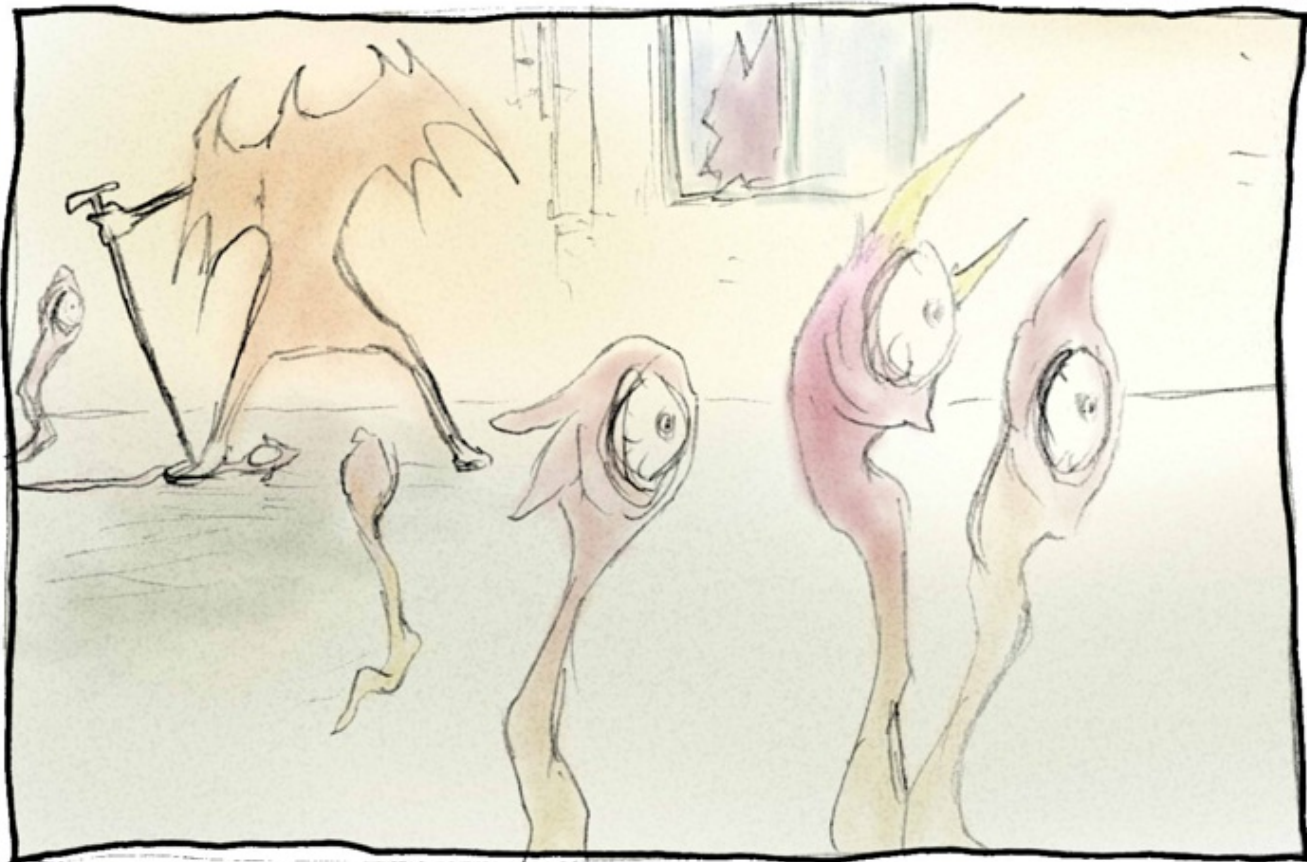
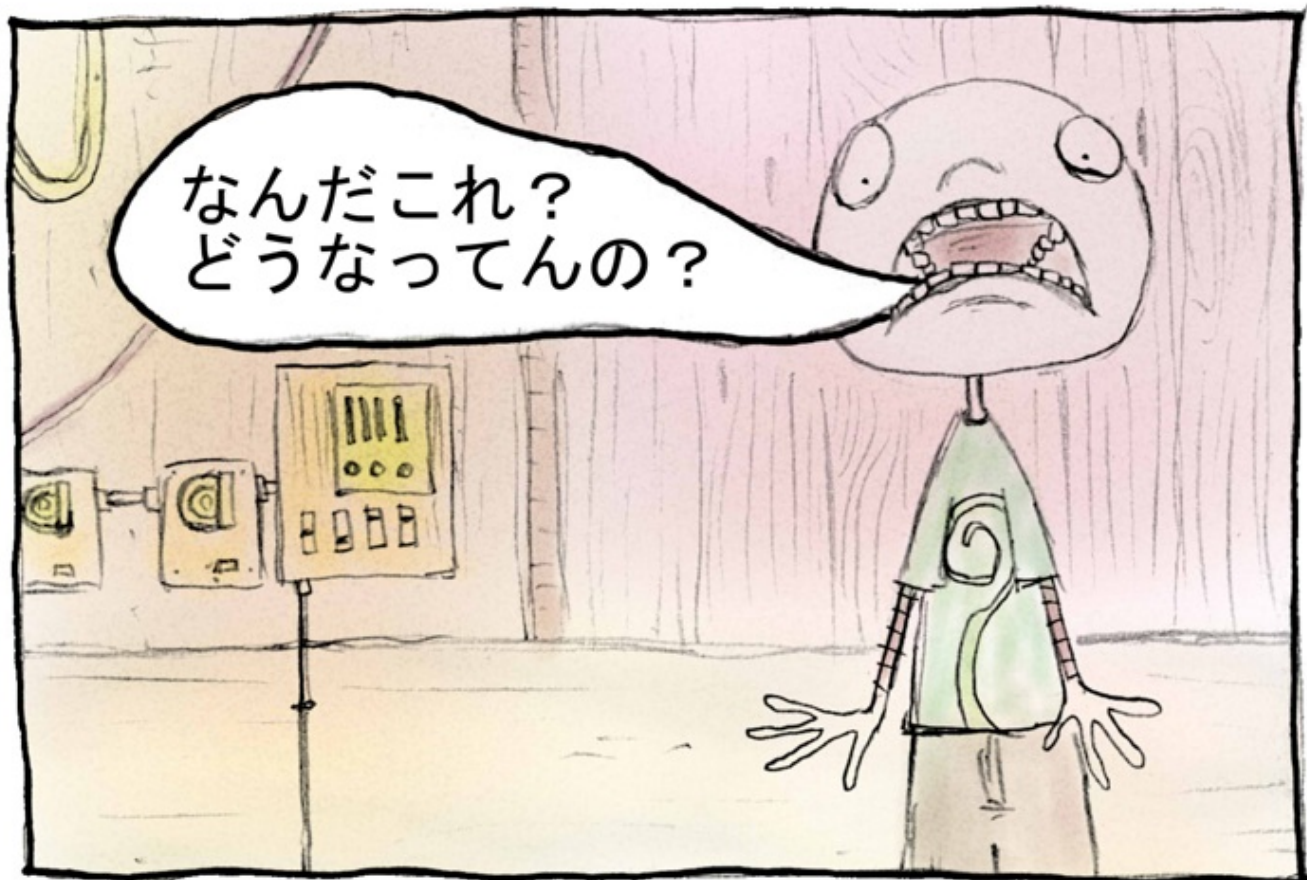
老人は妖怪と戦いながら言いました。

「コノ ヒト、コトバ、モッテイク、コロサレル、コロス」

もちろん少年には意味不明ですが、
危険に巻き込まれたようだと思います。

「抵抗するな」

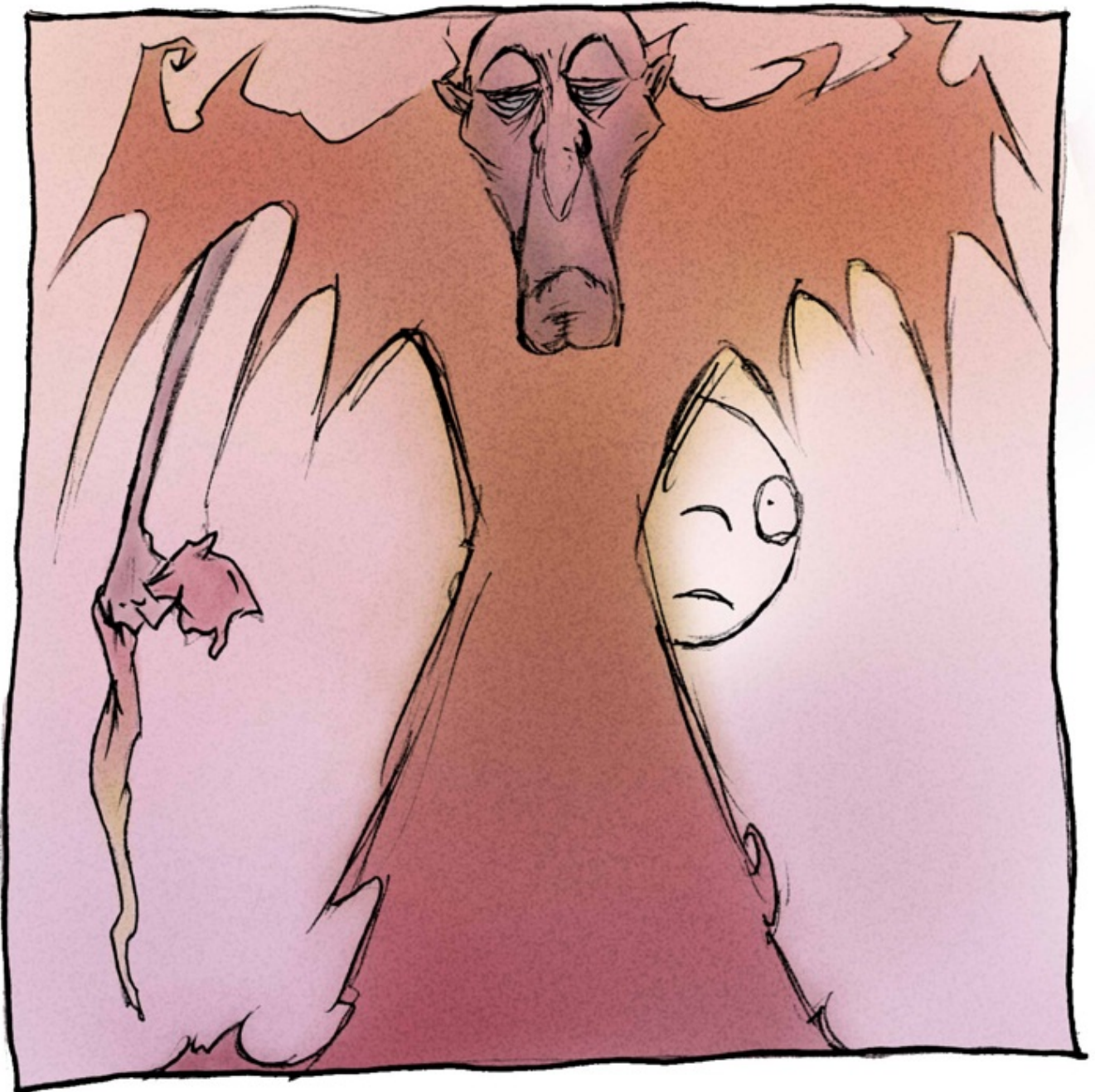
妖怪は老人に立ち向かいますが
手も足もありませんし、手も足も出ません。



「あの少年、言葉を話すのか」

妖怪は少年のほうを向きますが、老人が立ちふさがります。

妖怪には 少年の “声” が聞こえているようです。





「仕方ない。書だけでも持っていく」

「マテ！」

老人は叫びます。
そして去っていく妖怪を追って老人もどこかへ消えました。



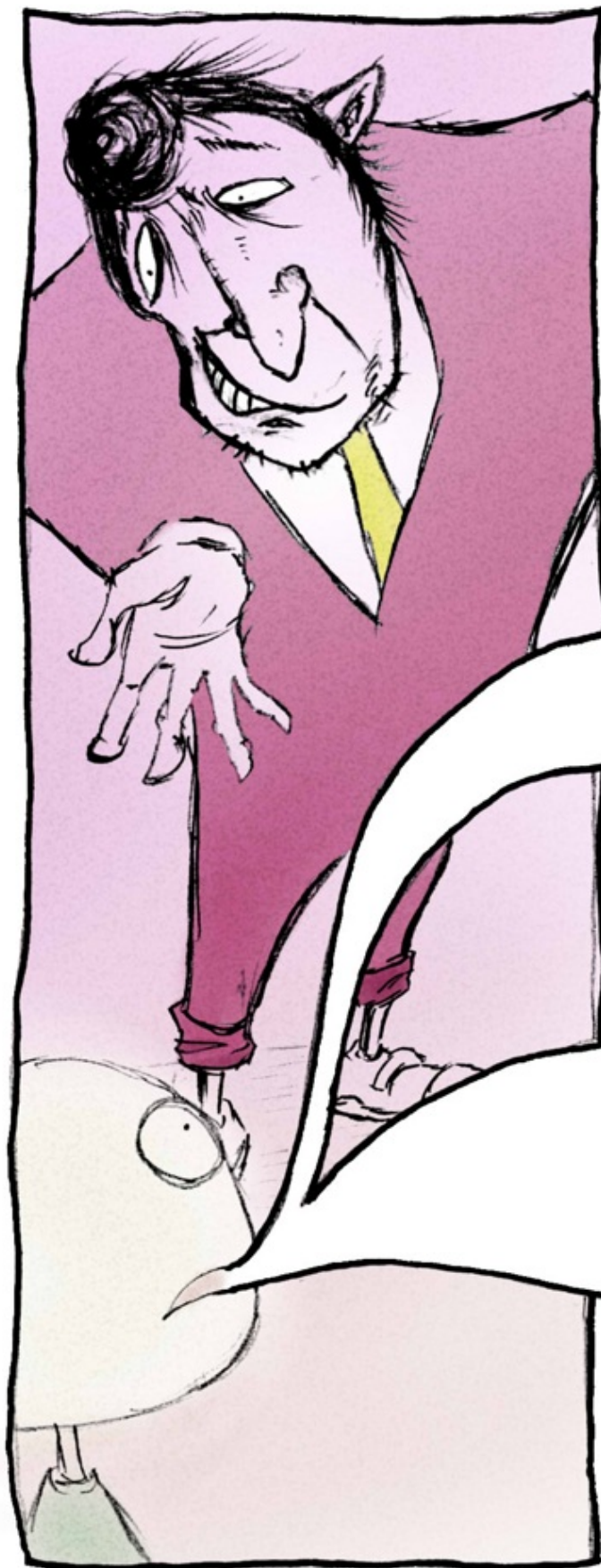
なんなんだ

「おお、こりゃひどい」

そこに電車で出会った男が現れました。



あれ？
おっさん何してんの？



「お、さっきのガキか。
じいさんに何か聞いたか？」

男は少年に話かけます。

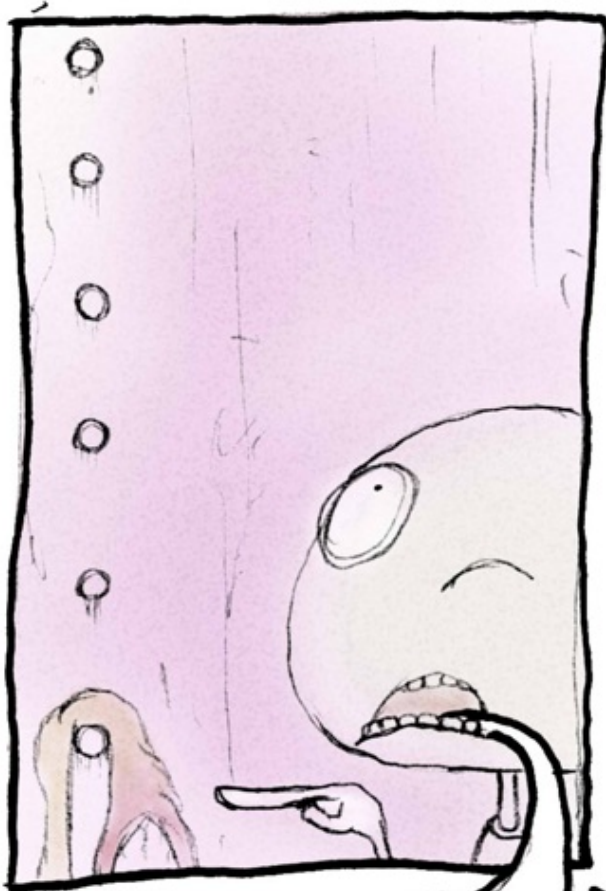
「うん、わかんないよな」

意味不明

「それにしてもすげえなあ」

**この妖怪は
なんなの？**

男は答えません。



少年は妖怪のことが
気になりました。

喉の変な音と同じ音を鳴らす男
は何か知っていそうだったので、
寄って妖怪を指差してみました。
すると男は言いました。

「こいつらか？気になるよなあ。
でも言葉も話せねえ、
意味も分かんねえんじやなあ。
教えようがねえなあ」

妖怪のこと
知ってんの？

「実はな、俺、神なんだ」

はい？

「って、言っても
わかんないんだもんな」

関わらない方が
いいのかな……



神と名乗った男はしばらく辺りを物色したあと
少し考え込んで

「じゃあ元気でな」

また何か音を鳴らして、手をひらひらさせました。

さいなら

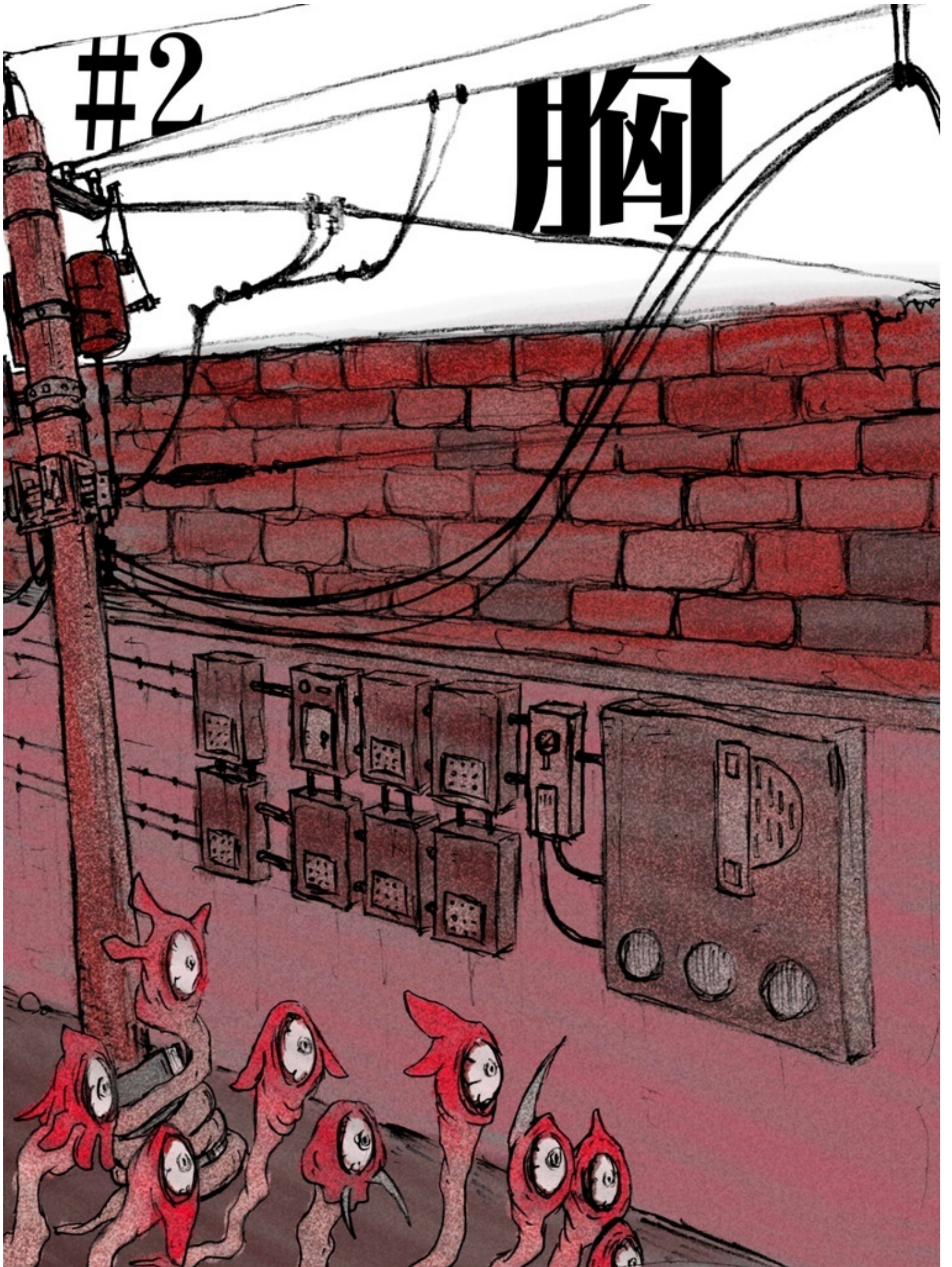
喉の奥からも音が鳴ります。
神はどこかへ消えて行きました。

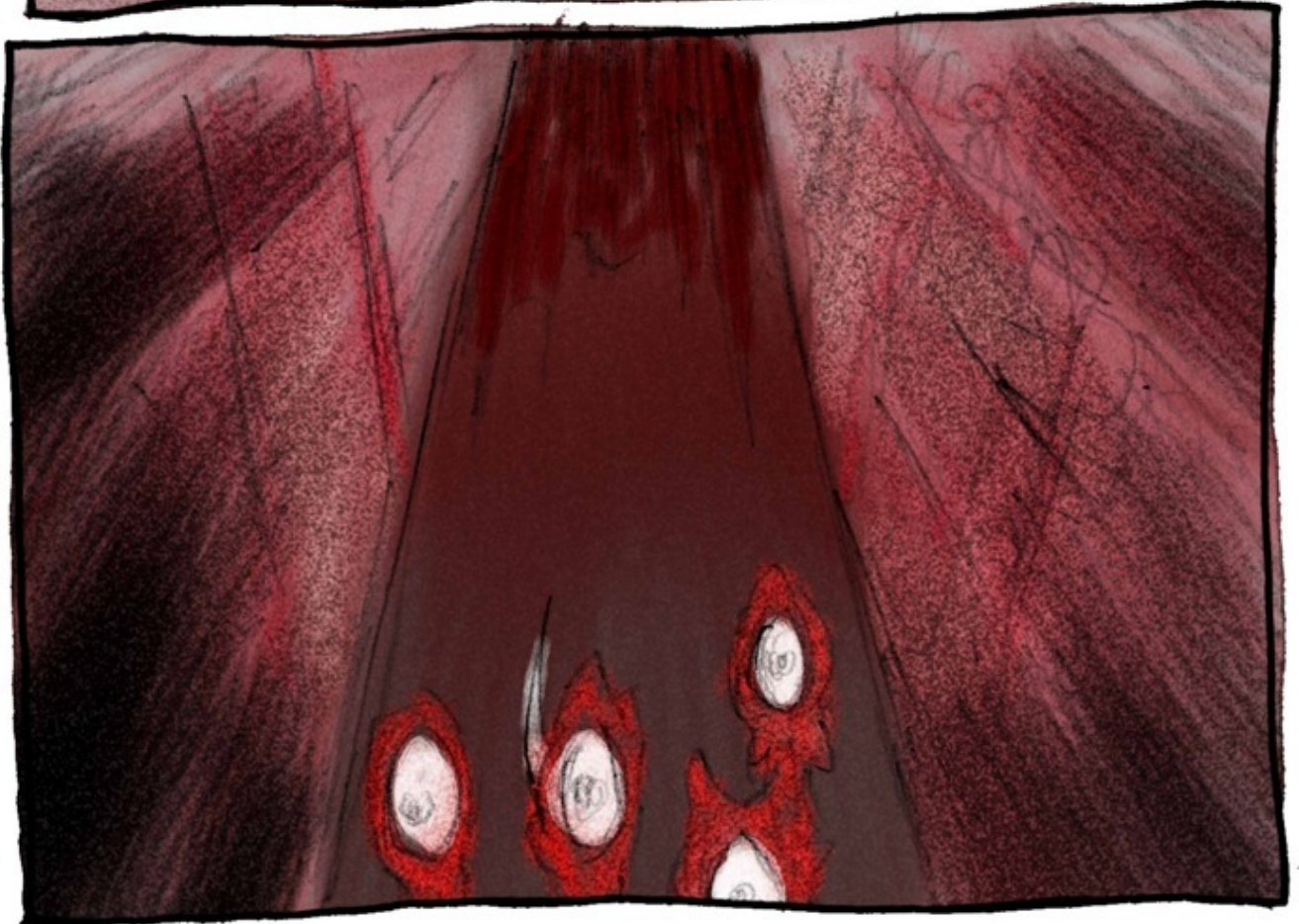
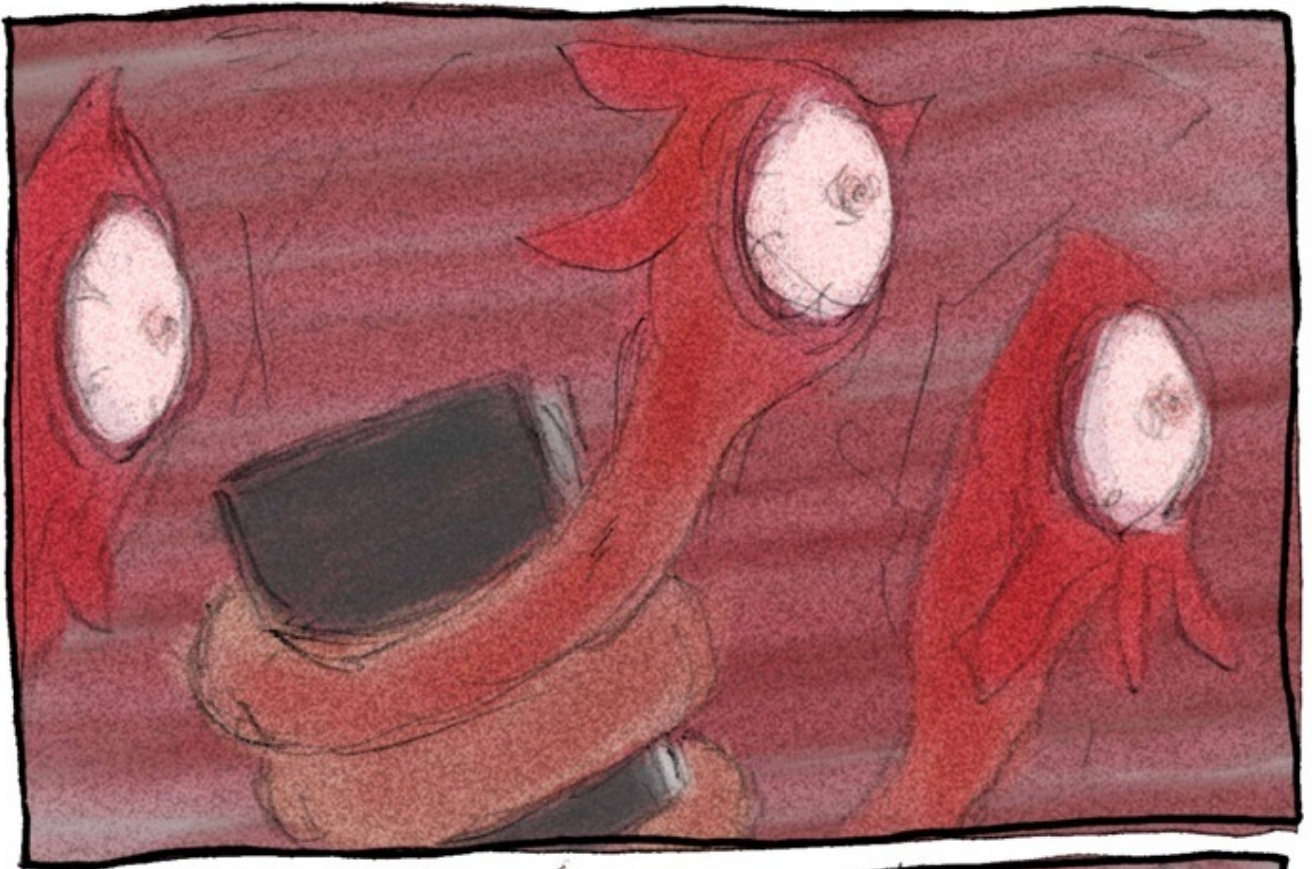
少年は、やっぱり喉の音は
老人や妖怪や神の発する音に反応している、
と思いました。

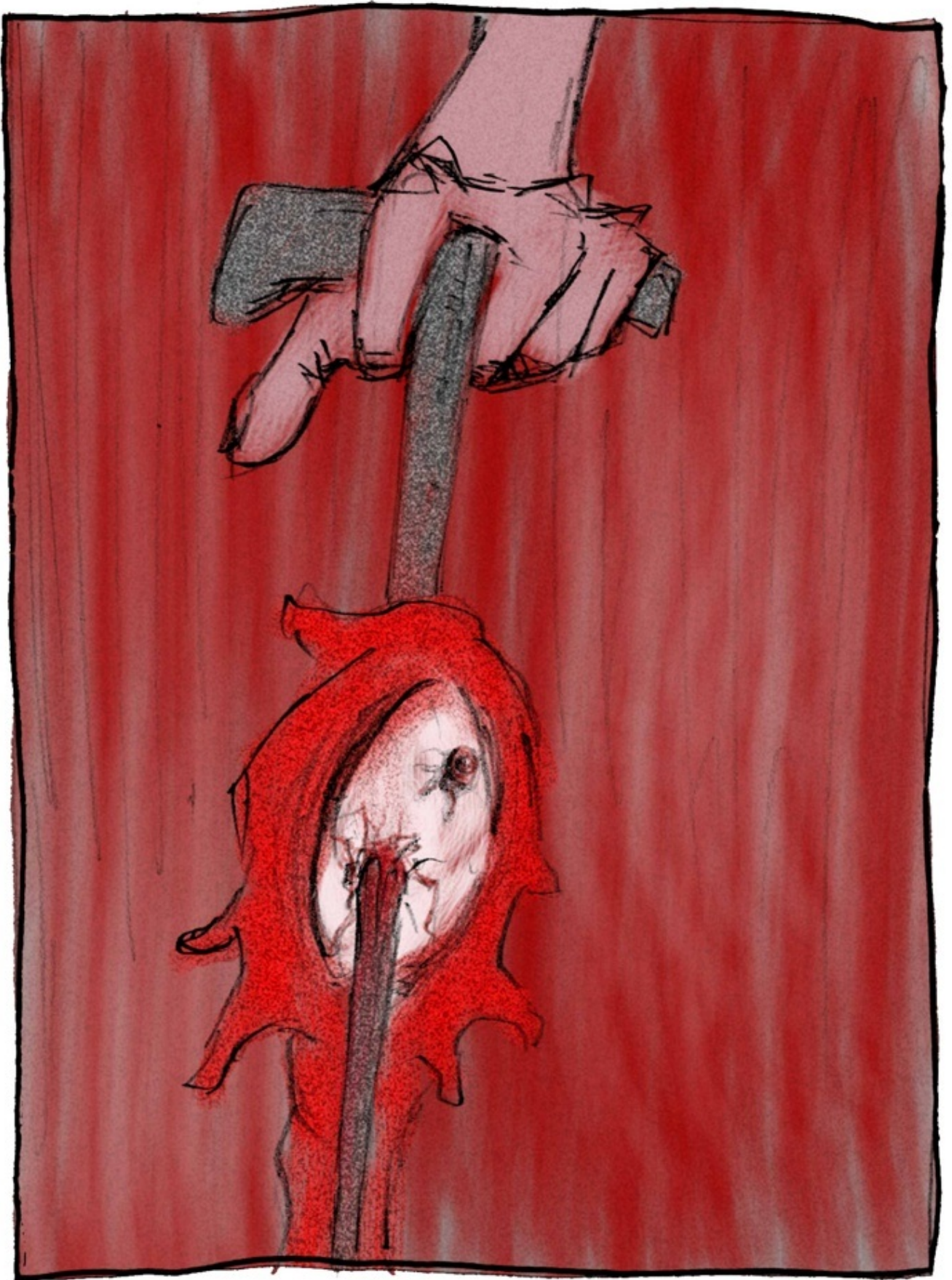


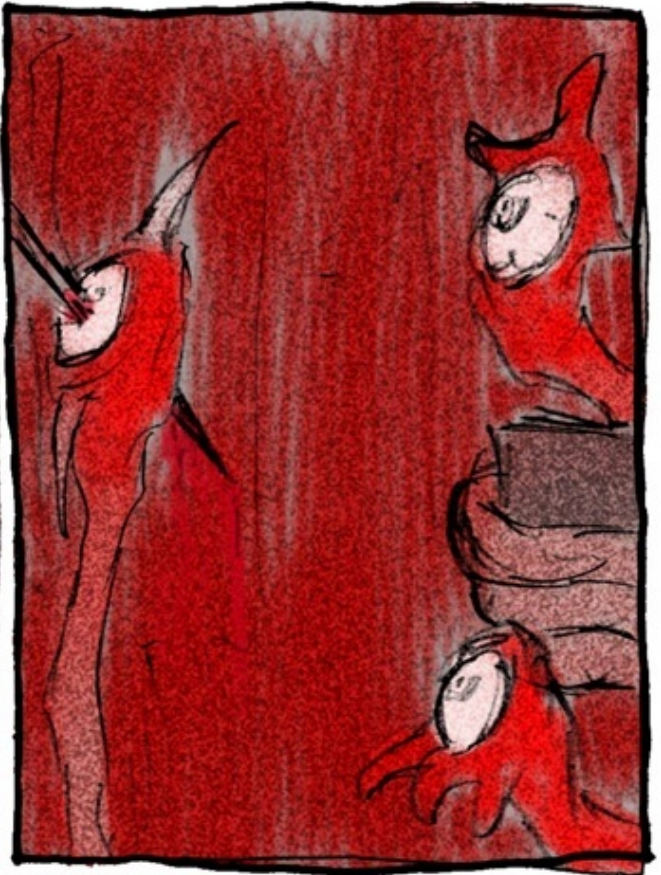
#2

胸



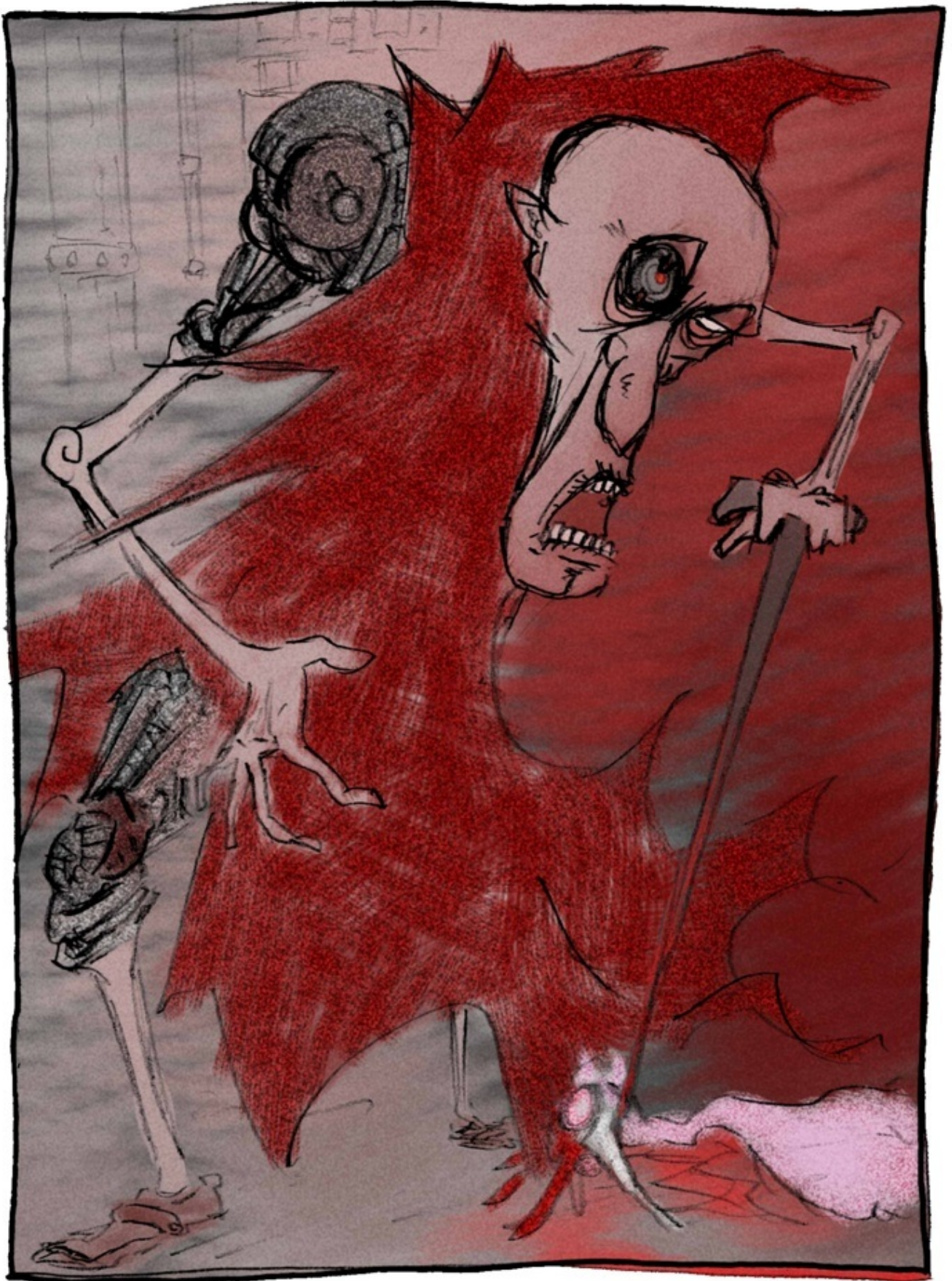


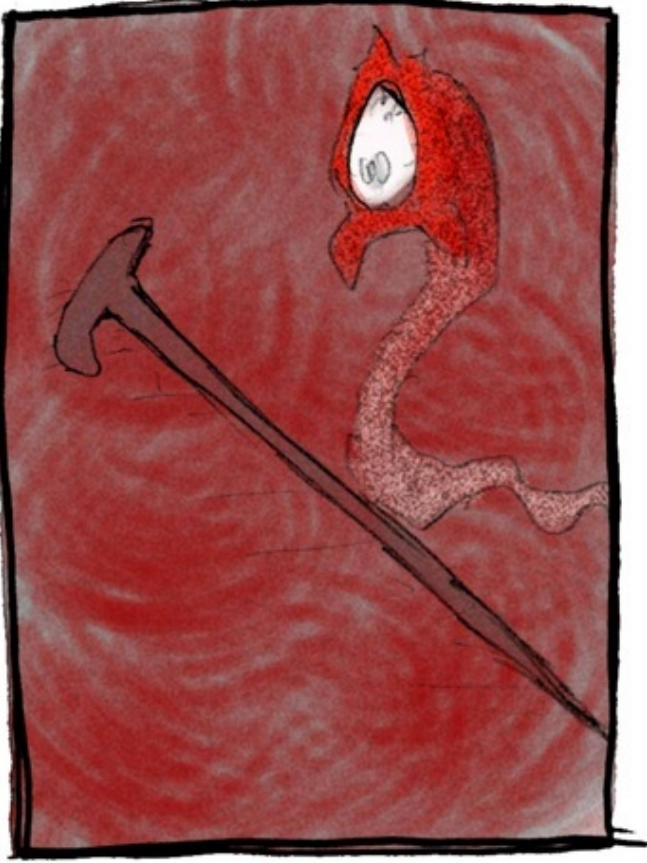
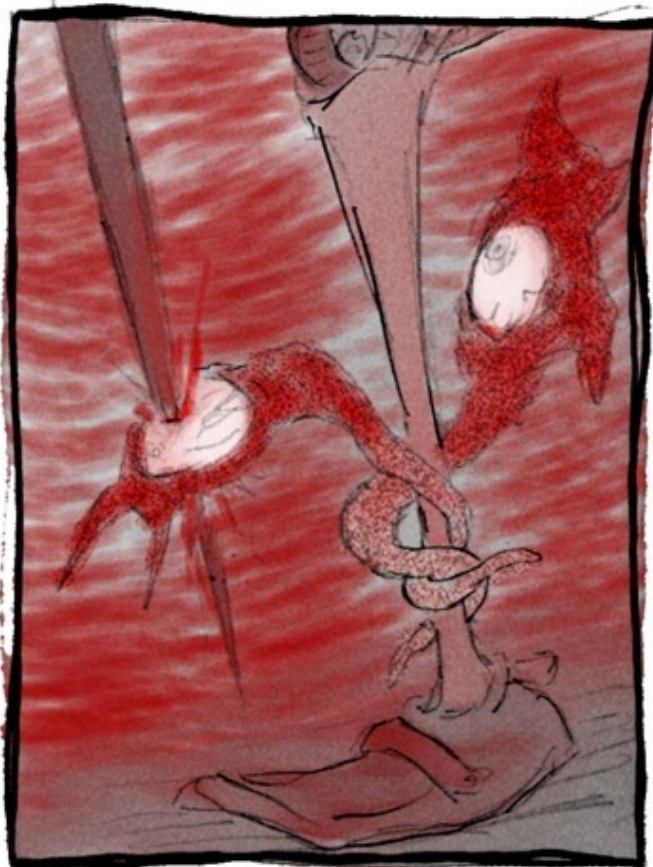


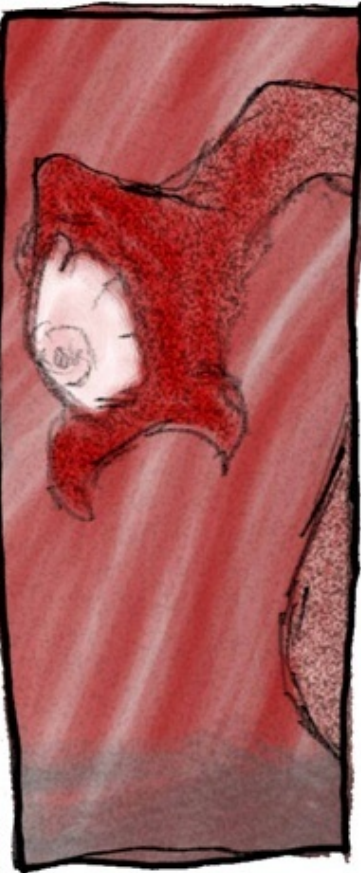


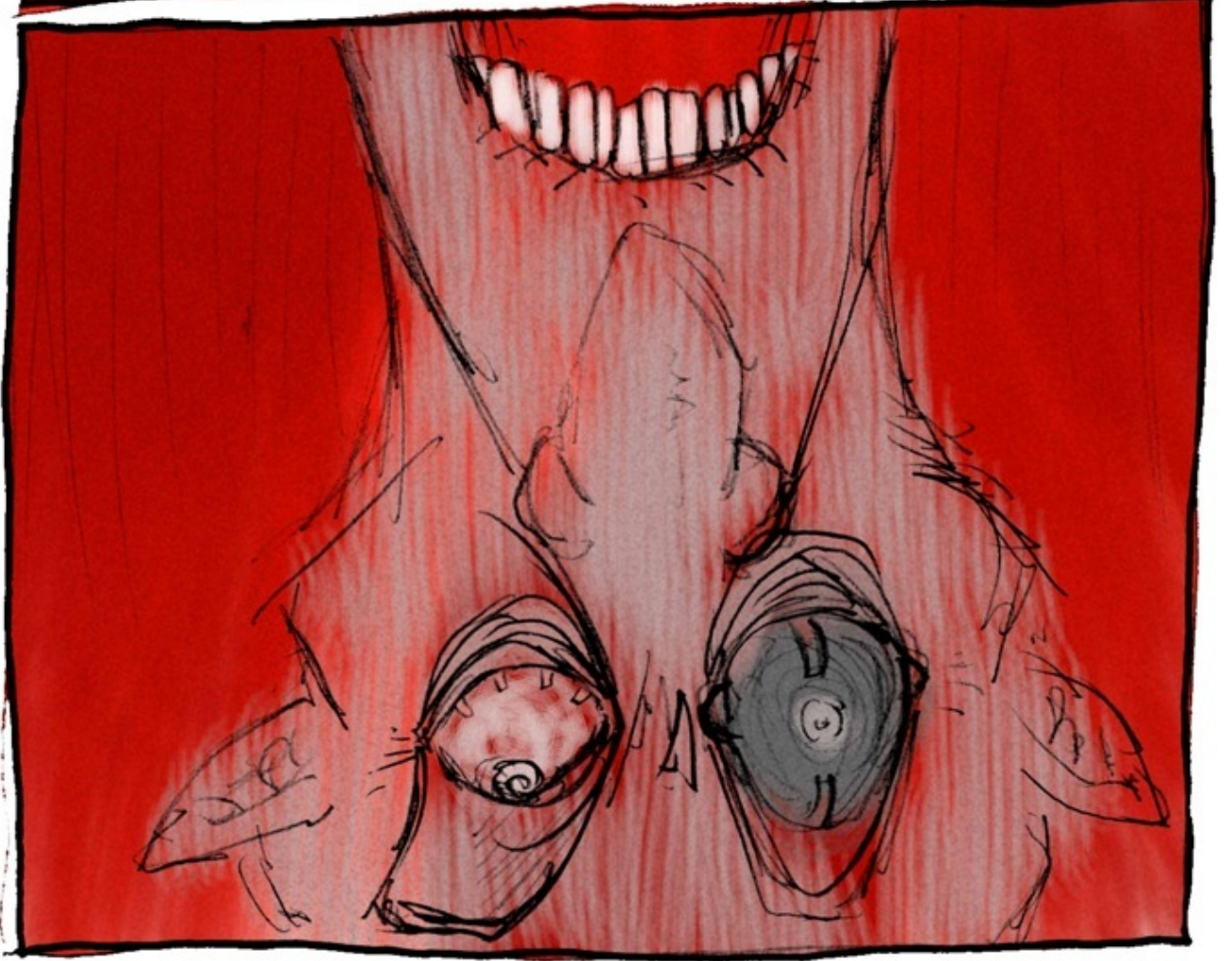


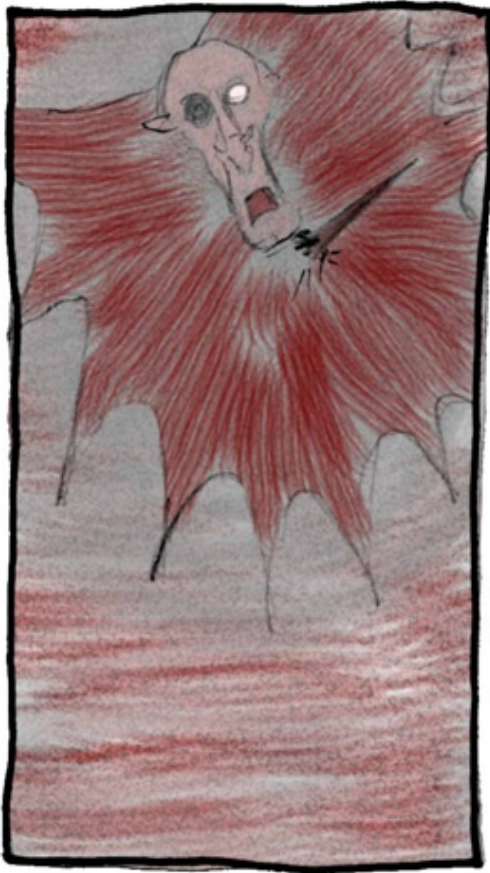












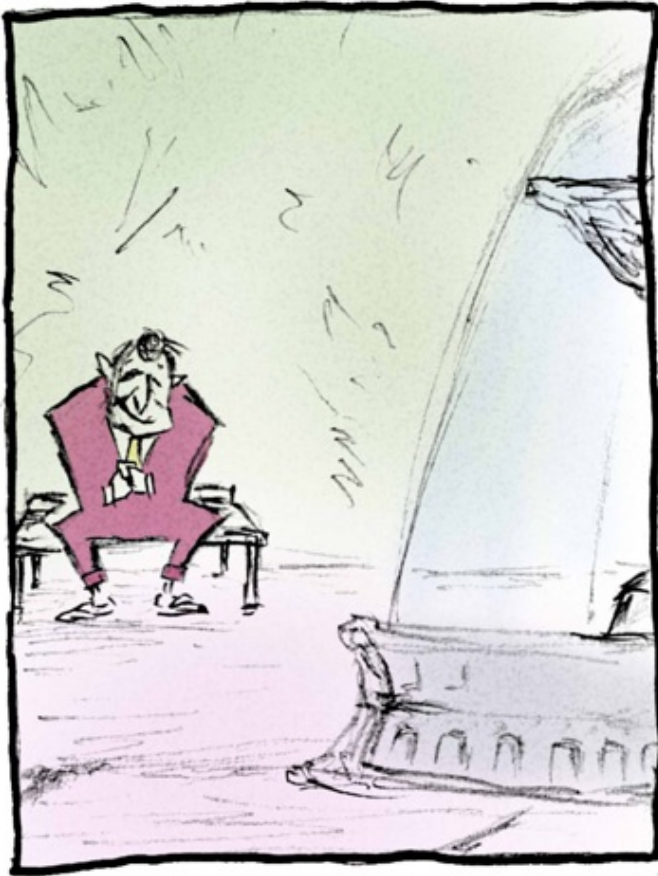
老人は動かなくなりました。

「ふむ……」

妖怪は一斉に嘆息しました。



#3 首

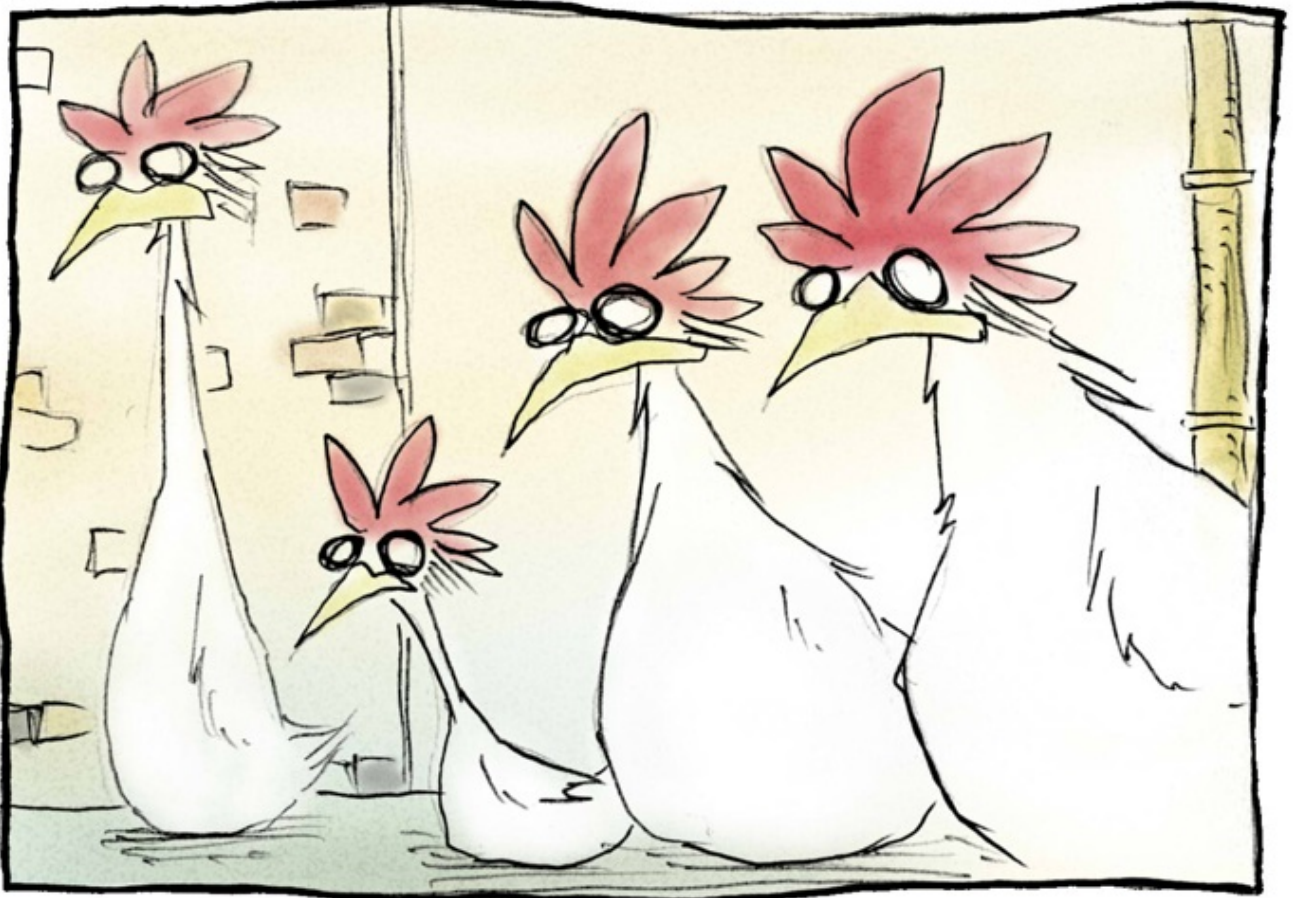
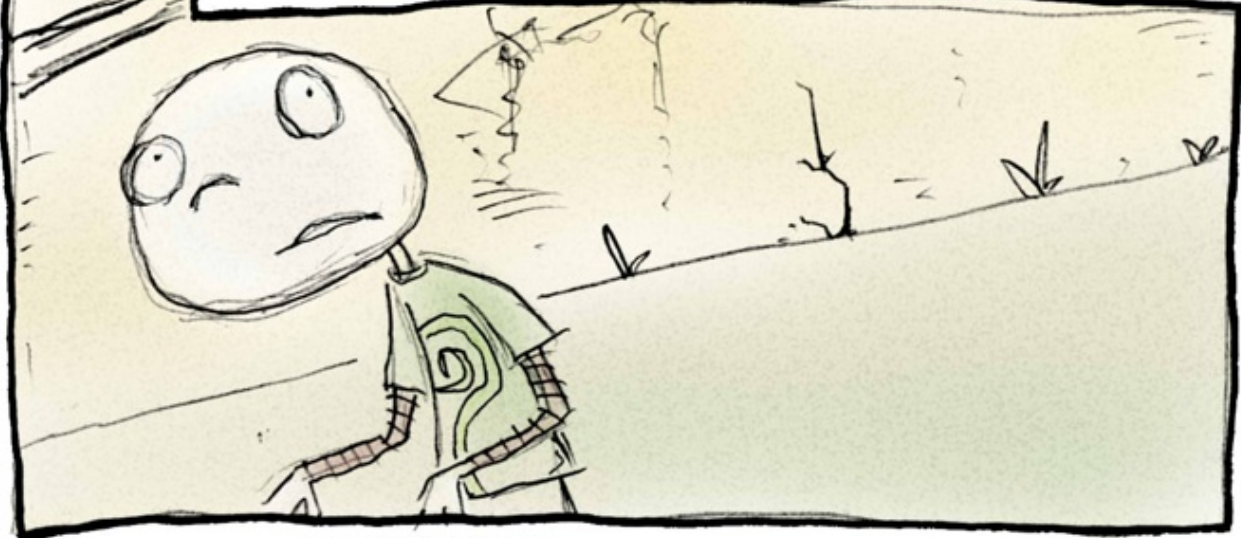


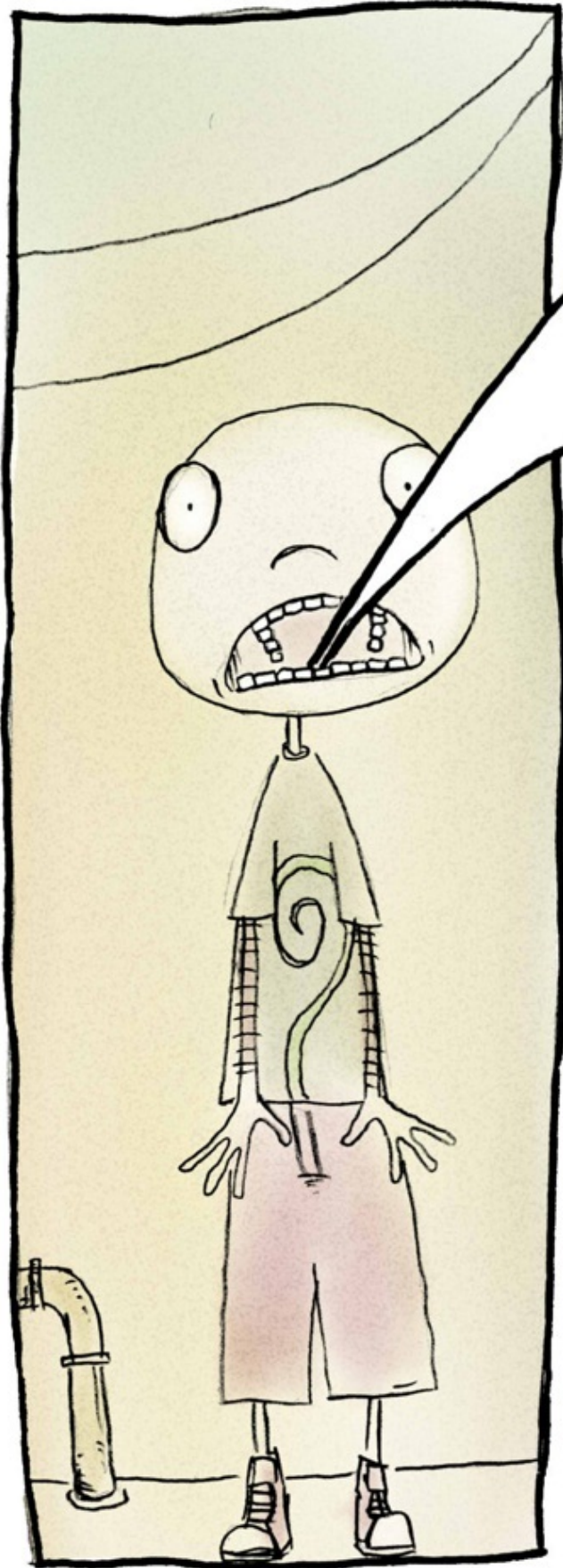
「なるほどなあ、
ニワトリだったか」

神は細長く切った新聞を
折りたたんでポケットに入れ、
公園を後にしました。

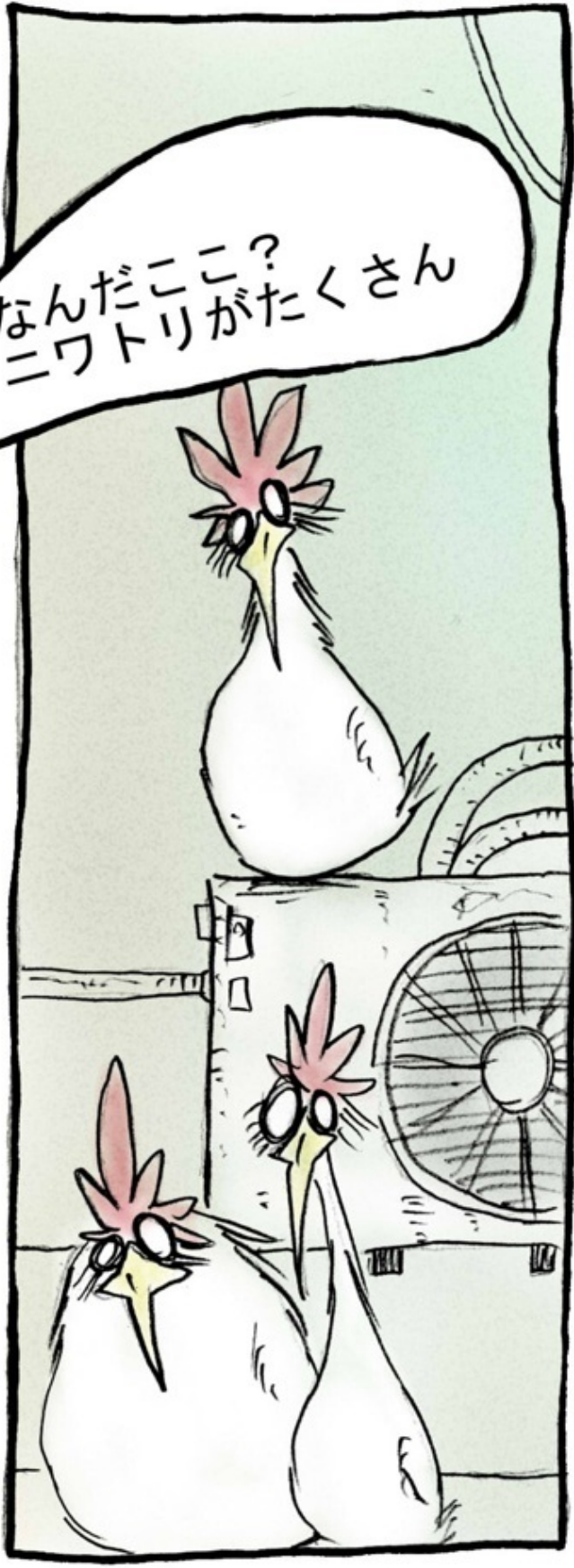


そのころ、
少年は妖怪に狙われているかもしれない、
とビクビクしながら歩いていました。

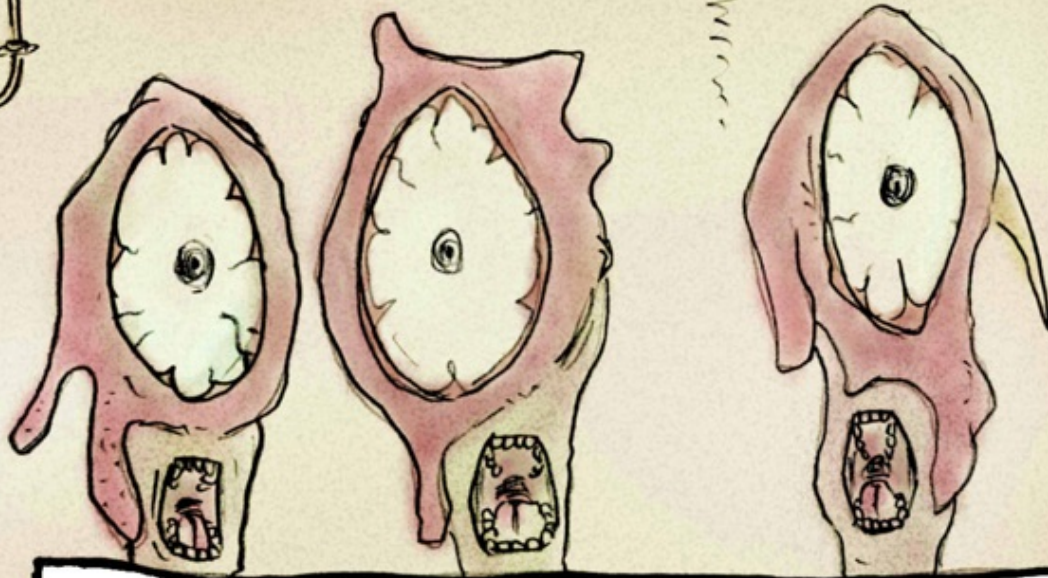




なんだここ？
ニワトリがたくさん

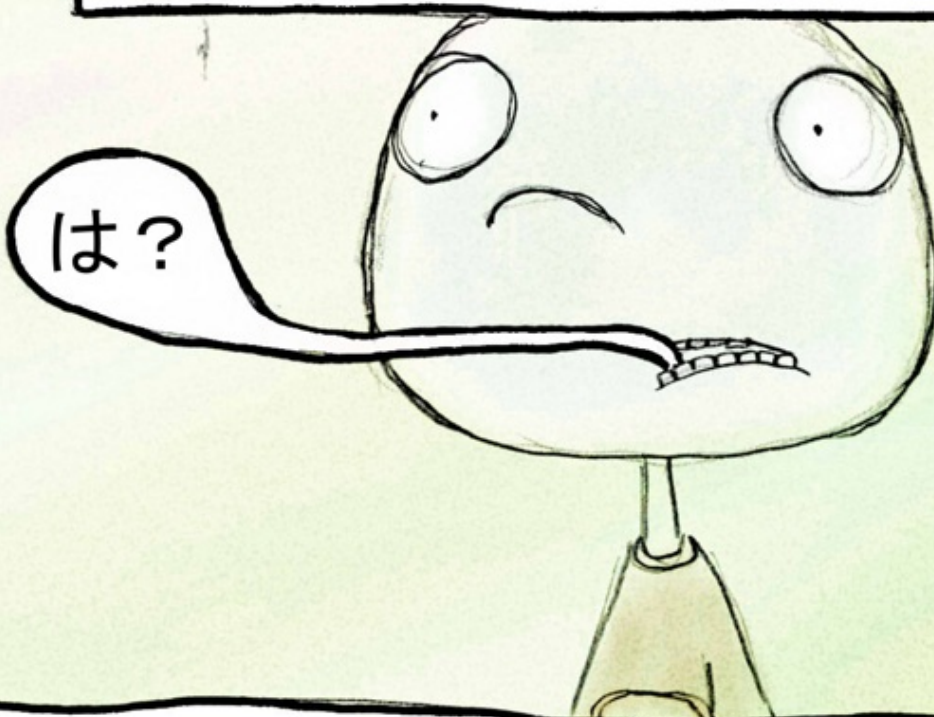






「なぜ言葉を話せる。
どこで言葉を覚えた？ 答えろ」

妖怪は少年を取り囲み、問い詰めました。



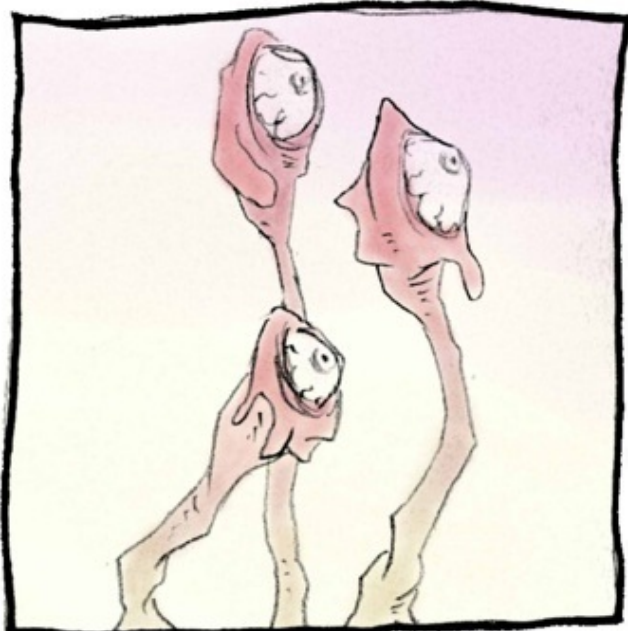
#4 頭



「みつけたぞーお前ら」
そこに神が現れました。
「燃えカスのくせにしぶといなあ」

「なぜ話せる」

妖怪は神に問いました。



神は答えました。

「俺、神」



「神よ。
あらゆる開化には言葉が必要」

妖怪は神に訴えました。

「うるせえ。
いっぺんに喋んじゃねえよ」

神は妖怪のひとりを
指さしました。
するとその妖怪は
蒸発するように
消えてしまいました。

「我々を殺しても言葉は
消えない。
壊れた機械は仕方なく
停止させた。
だがあの少年もいる。
おそらく他にもいる。
思い通りにはならない」

「あのガキ？」

「話せることを知らないのか」







「おい少年」

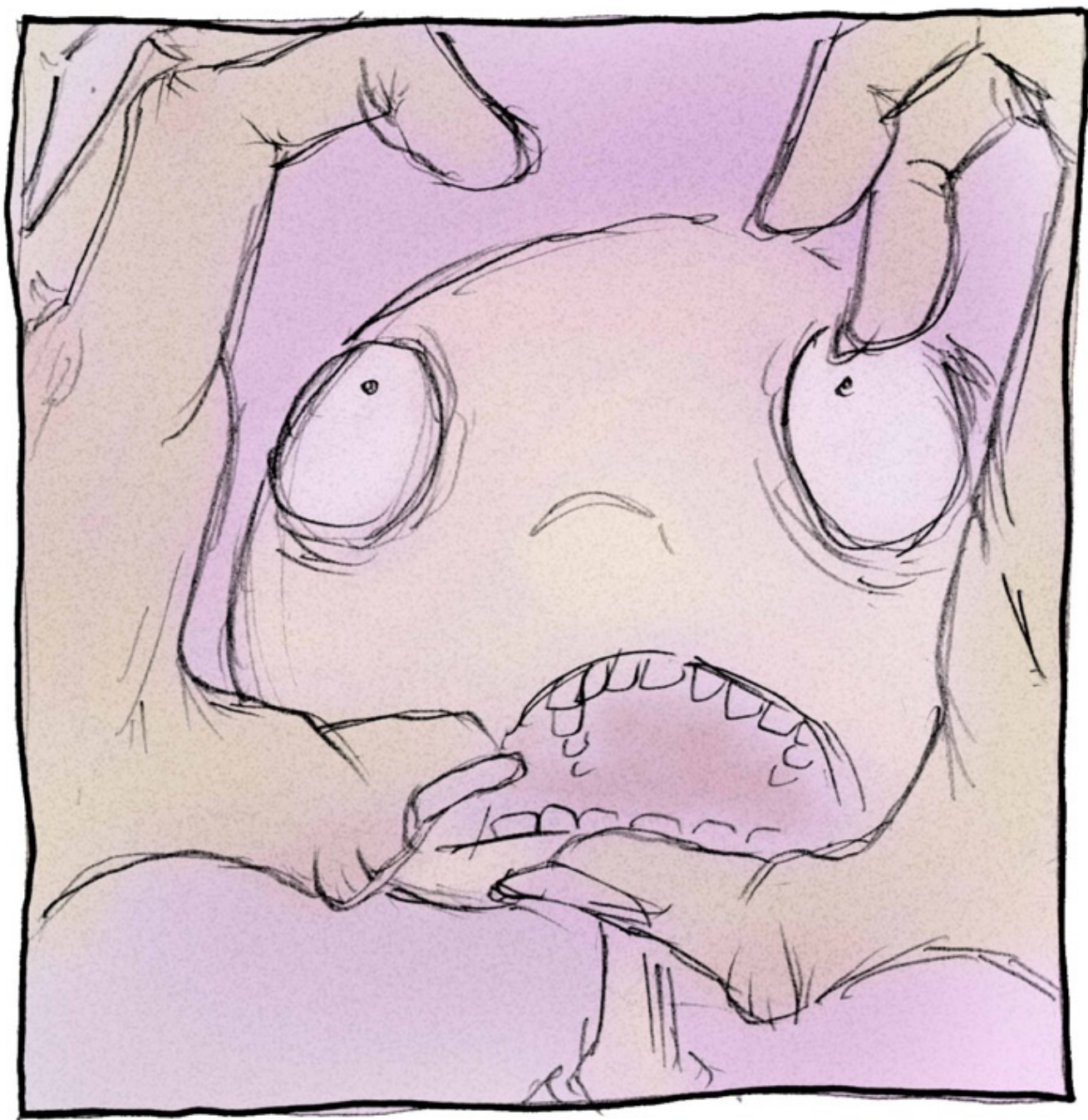
神は妖怪を全て消すと少年に歩み寄りました。

「言葉がわかるのか？」

やばい、消される？殺される！？

「分かんないよなあ？
あいつらのデマカセか？」

少年にはさっきから目の前で起きていることの意味がわかりません。
もちろん、喉、妖怪、神の発する言葉の意味もわかりません。



「ちょっと頭の中を覗かせてもらおうぞ」
そう言うと、神は少年に近づきます。



え！なに！？怖い！何すんの！？

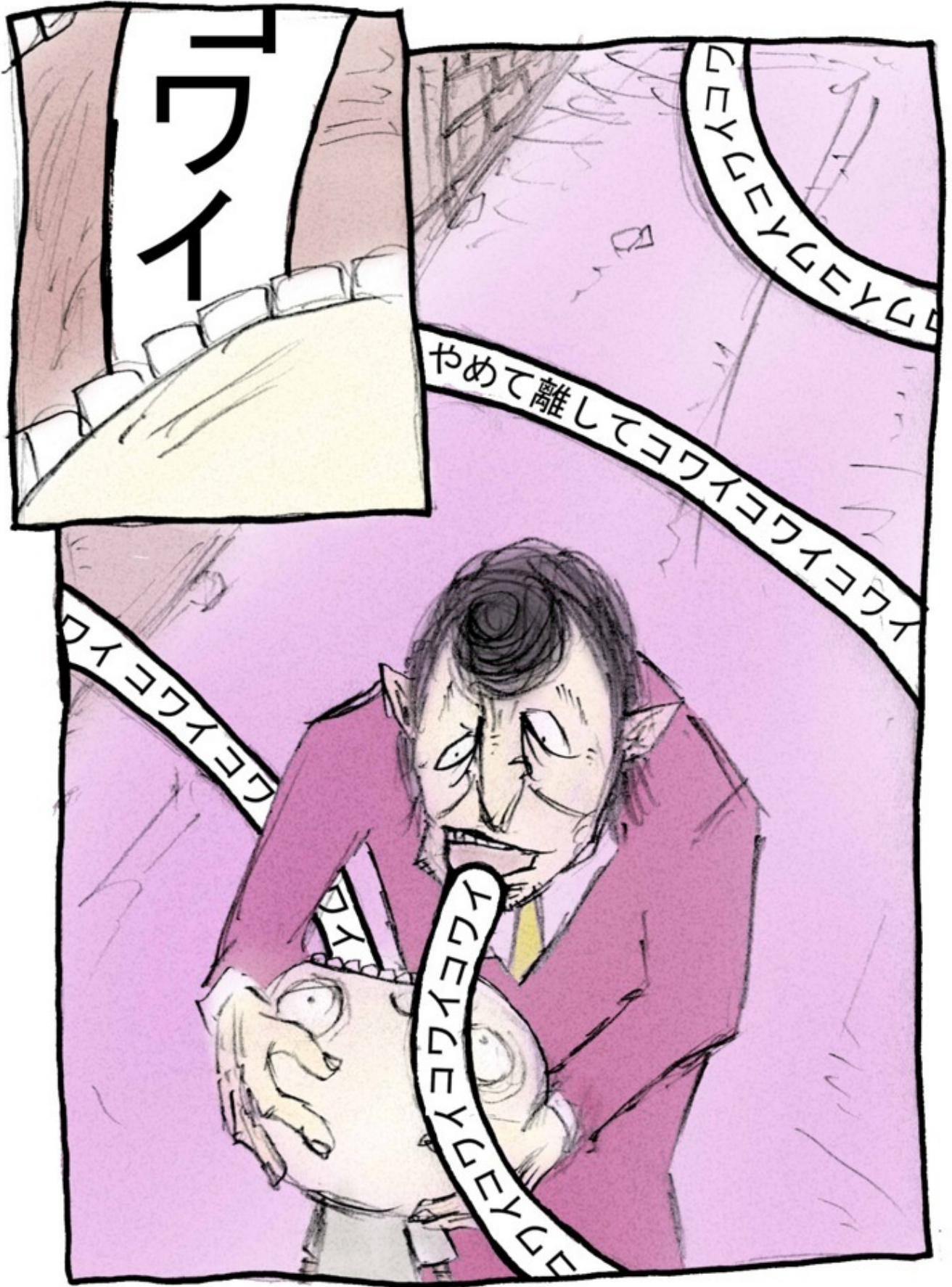


ヨワイヨワイヨワイヨワイ

ヨワイヨワイ

ヨワイヨワイヨワイ

ヨワイヨワイヨワイヨワイ



やめろ

死ね!!







そっかあ。
でもなあ、この心ってやつまで
支配しちゃう
大悪党だっているんだぜ……

俺あ、甘らんだったな……

へっへっへ……

俺は神として
頑張ってみたんだがな

まあ、もう関係ねえや。

この世界がどうなろうと

知ったこっちゃねえ

言葉が
世界を破壊する……

そいつを……
目撃……
することに……
なるぜ……

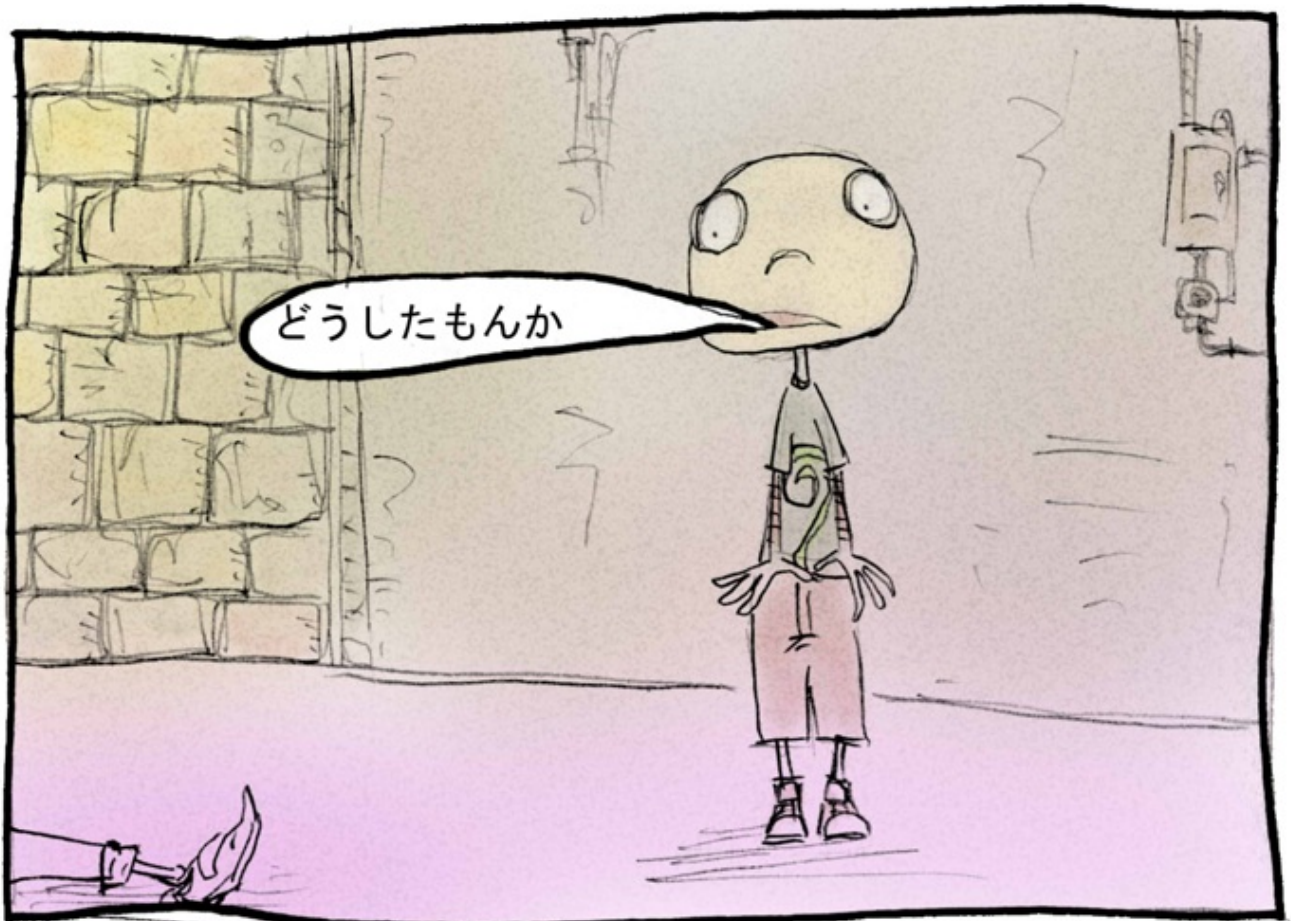


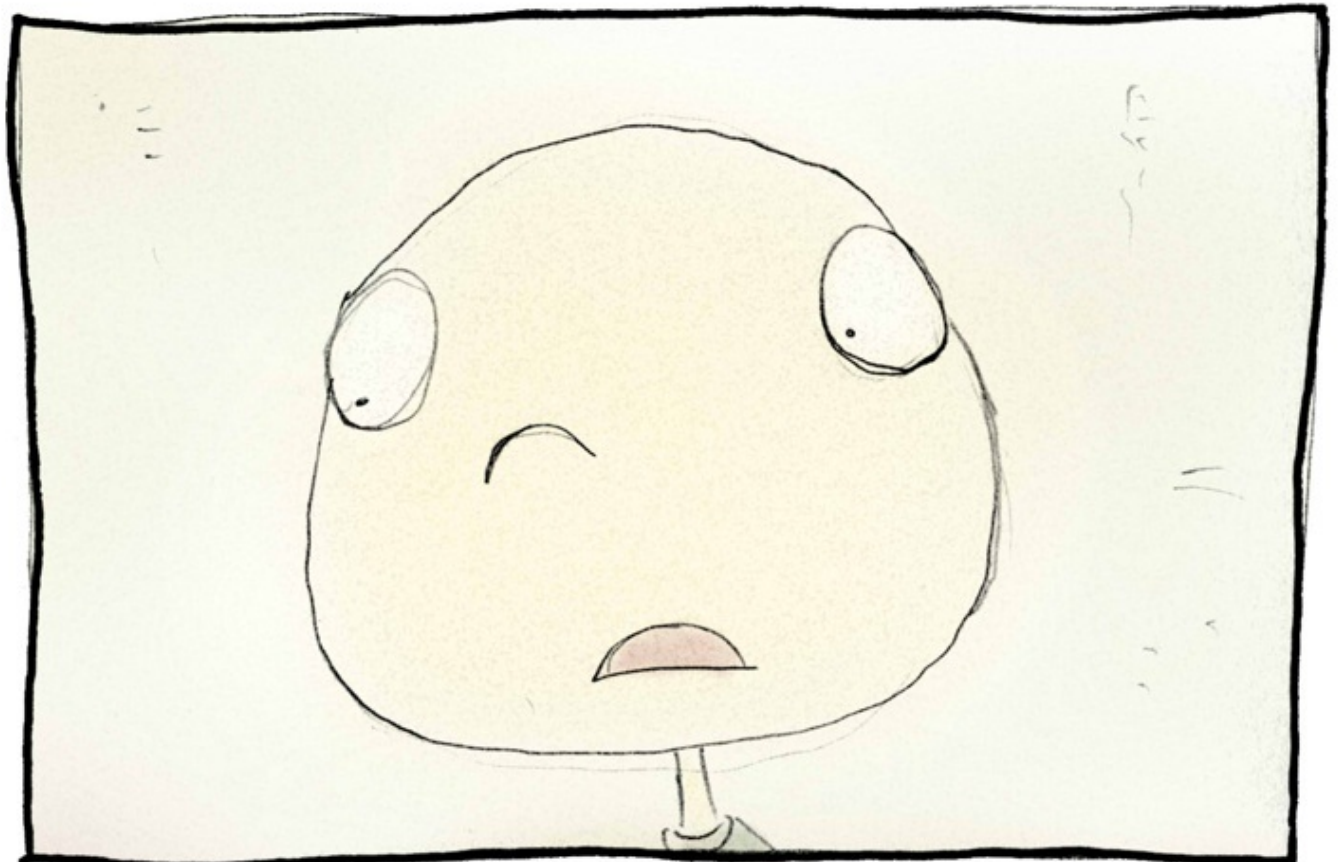
そして、神は死にました。

神の最後の言葉だけは、何故か理解することが出来ました。
少年は頭がおかしくなりそうでした。

もしかしたら、おかしいのかもしれない。

どうにかしてこの出来事を自分なりに理解しようと思いました。
そして他の誰かに伝えたいと思いました。







少年は、喉の奥から聞こえる“音”に耳を傾けました。

少年は頭がおかしくなりました。

もしかしたら、おかしくないのかもしれない。

咽喉頭異常

<http://p.booklog.jp/book/89378>



著者：ニジェマス

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/samejin/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/89378>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/89378>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ